



日本よ、今、闘論！倒論！討論！ 2024 第845回
グローバリズムの現在 2024

R6/2/8

パネリスト：

- 伊藤貫（国際政治アナリスト）※スカイプ出演
- 川口マーン恵美（作家）
- 及川幸久（作家・会社 CEO・X 動画配信者）
- ジェイソン・モーガン（歴史学者・麗澤大学国際学部准教授）
- 西村幸祐（批評家）

司会：水島総

水島「皆さん、こんにちは」

一同（礼）

水島「日本よ、今、闘論！倒論！討論！ 2024 第845回目の討論となります。今日は、この問題について本当に見識をお持ちの皆さんにお集り戴きまして『グローバリズムの現在 2024』という形で討論してみたいと思います。グローバリズムと言ってもね、様々な形の政治的な表れや経済的な表

れ、或いは人の心とか、人類の全体の価値観というものに全部、関わって来る問題ですけども、でも、今、現実にはヨーロッパでは戦争が行われ、イスラエルとパレスチナとの戦争も行われていると。大変、きな臭い時代になって来ている中で、うちの国は増税メガネと呼ばれる人が、のんびりと統治をしているというような状態であります。

そういう中で、今日は世界が今、一体、どうなっているんだろうというような視点で、皆さんと共に話してみたいと思います。大変、厳しい時代になっていると思います。それでは、まず、ご出席の皆さんをご紹介します。批評家の西村幸祐さんです。宜しく」

西村「ああ、宜しくお願いします」

水島「作家の川口マーン恵美さんです。宜しくお願いします」

川口「宜しくお願い致します」

水島「作家で会社CEO、X動画配信者、及川幸久さんです」

及川「宜しくお願いします」

水島「歴史学者で麗澤大学国際学部准教授、ジェイソン・モーガンさんです。宜しくお願いします」

モーガン「宜しくお願いします」

水島「そして今日はスカイプのご出演です。ワシントンから国際政治アナリストの伊藤貫さんです。伊藤さん、宜しくお願いします」

伊藤「宜しくお願いします」

水島「今日は、こういうメンバーですから、どんな話が出るか楽しみだなあってということですけども、今の状況について簡単にそれぞれの感覚を、みんな、知りたいと思いますので、じゃあ、年の功からなので西村さんからお願いします」

西村「ああ。(笑)」

一同「(笑)」

水島「今、2024、グローバリズムの現在を、どんな風に捉えていますか」

西村「はい。ここ2~3年ですね、ずっと言われているのがグローバリズムとナショナリズムが対立しているというように一般的には言われていまして、そういう面っていうのは確かにあると思うんですけど、ひとつグローバリズムってものを定義し直すことが必要かなっていうのを、実は最近、思っているんですよ。

というのは、例えば、これは昔の例ですが、坂倉順三という建築家が居ましてね、まあ、こういう方ですけども。彼はモダニズム建築の第一人者として戦前から非常に高く評価されていた人です。それで、彼が1937年、2.26事件の翌年ですが、昭和12年にパリで行われました万国博覧会に、日本館のデザインを担当したんですね」

水島「うん」

西村「ええ。これが、その日本館です。勿論、私は行ったことがないし1937年なんて見たこともない訳ですが、少なくとも写真で見ると、やっぱり外観だけではなくて、中身も、非常に素晴らしい建築ですよ。ところが当時、日本では結構、日本的じゃないと批判されたんですね。これは西洋建築におもねったものを作っているという批判が凄く多かったんですけども、ところが、これが世界で絶賛を浴びましてね。この年の世界の建築のグランプリを受賞したんですよ」

水島「うん、うん」

西村「その理由は、どういう理由かと言うとね、実に日本的な建築だと。そういうように欧米人に評価された訳ですね。確かにそうなんですよ。日本の伝統建築の空間論の非常に、坂倉さんという人は、きちっとコルビジェに師事していた人ですから。コルビジェの創った建築を上手く日本の空間論に嵌めて特に中身、インテリアも凄いんですよ。スロープを登って行くと丁度、エッフェル塔が正面に見えてきたりとか、それがティー・ルームだったりするんですよ。喫茶室。そういう建築が当時、そのように酷評されてしまったという…」

水島「国内でね」

西村「ええ」

水島「うん」

西村「日本の国内でね。それは一体、何なのかって考えた時に、坂倉さんの建築っていうのは、やっぱり、そのあと、戦後になって、例えば、クロード・レヴィ＝ストロースが、1970年代になって文化人類学的な見地から、日本文明っていうもの、或いは日本そのものを評価した時に、日本は独自の文明を持っていて、それで他のアジアの文明圏とは、全然、違うと。

それで西洋やアメリカのものを全部、受け入れて、日本の中でろ過して、そして日本流のものを全部、創り出してきた。そういう何千年もの歴史があるということをレヴィ＝ストロースは言っていたんですよ。1970年代の時の彼の意見は、今やアジアやアメリカ、アメリカの影響も凄く受けたけども、アメリカやヨーロッパは日本から学ばなくちゃいけないっていうことを言ったんですよ」

水島「うん」

西村「彼が亡くなるのが確か70年代の終わりか80年代の最初ですけど、それが最後の言葉になった訳ですね。それから暫くして冷戦の終わった後にハンチントンが『文明の衝突』なんて言い出しましたけど、その前に、とくにレヴィ＝ストロースが言っている訳ですよ。そこで考えなければいけないのは、日本が持っているものはね、実はグローバリズム、グローバリズムっていうか何て言うんでしょう、国際性、世界に伝わって行くものをね、それはソフトウェアとして持っている訳でね。それは江戸時代末期の浮世絵だってそうですし、実際、パリの印象派に非常に大きな影響を与えた訳ですよ」

水島「影響をね」

西村「そういうことを考えると、何がグローバリズムであって、何が日本のオリジンなのかっていうことを、きちっと定義して考えていくことが必要だっていうことが一つです。

もう一つ、私が今、一番、危惧しているのは、今の悪しきグローバリズムというものは、実は西洋社会がずっと作って来たものが世界を席卷している。或いは、大東亜戦争の時の日本の立場から言えば、英米がアジアを侵略して来たというものがあつた訳ですけど、そういうものと全く違ったグローバリズムになっちゃっていて、英米だけが持っているものっていうんじゃないで、そういうものを超えたところで、それこそスイスのダボスという保養地で集まる人達がつくっているもの。

そして、そこにマイクロソフトのビル・ゲイツが居るとか、まあ、そんなようなところが創り出しているものっていうのは、それぞれの国の国体であり政体っていうものに、非常に影響を及ぼすような形で進んちゃっている訳ですよ。その現実っていうものは中々日本人が見ることが出来ないんで、やはり、それを、しっかり見極めて何が危険かっていうことを、もう一度、確認することが必要だと思います」

水島「そうですね」

西村「あのう、長くなっちゃっていいですか」

水島「うんうん、まあ」

西村「例えば、直近の出来事と言えば、以前、FOXの人気キャスターだったタッカー・カールソンがモスクワに入ってプーチンのインタビューをやりましたけども、それに対してアメリカでは物凄い批判が起きていて、アメリカだけではなくてEUが制裁を科すなんて言っているんですよ。

それでイーロン・マスクが、それに対して怒ったメッセージを出したりしていますけども、そこに見られるものってというのは、アメリカが、もう、グチャグチャになっていて、アメリカの保守系メディアを見ても、その報道が全然、上がっていないんですよ。だから本当に情報統制が行き届いちゃっている訳ですよ。全く無いですよ。タッカー・カールソンがプーチンに会ったってということがメインストリーム・メディアで一行も載っていないんですよ」

水島「うん」

西村「日本では、ちょこちょこ書かれていますけども、そういう現状というものは一体、何なのか。それを考えた時に、やっぱり日本人の立場で言うと日本を大事にしよう、大切にしようと思っていた人達がどんどん亡くなっていく、まあ病気と思われる謎の死を遂げたりとか、或いは、謎の暗殺事件があったりとか、そういう状況は、ここ10年間の中で、ずっと起きている訳ですよ。

その一番を解り易く言えば2年前の7月8日の安倍元総理の暗殺っていうものがですね、あれから始まって、今の日本のグチャグチャの状況ってのが全部1本の糸で繋がっているんじゃないか。それは誰がやっているのかってことですよ。それは、やっぱり今日の話の中でそういうものが見えてくればいいなあと、今、私は考えています」

水島「はい。どうも有難うございます。では川口さん、お願いします」

川口「はい、宜しくお願いします。『グローバリズムの現在』というタイトルですけど、私も西村さんと同じで、じゃあグローバリズムって一体、何かっていうことを、やはり、もう一回、考えなきゃなって思ったんですよ。じゃあ、一体、グローバリズムって何か、多分、一般では、良いイメージの言葉になっていると思うんですね。

それで冷戦が終わった時に、私は、はっきり覚えているんですけど、あの時って何か、みんなが、これから戦争の無い平和な世の中になるみたいな、何か凄く希望があったじゃないですか。それで、その時に丁度、メルセデスベンツの社長のロイターって人が、これから自分達のメルセデスベンツという車は、メイド・イン・ジャーマニーじゃなくて世界の何処で造ってもいいんだと言って、だから自分達のクオリティはメイド・バイ・ダイムラーになるんだっていう風なことを言ったんですよ。

私、その当時って、ああ、国境がなくなって色んな所で生産が出来て、みんなが雇用されてという世界になるのかなあと、当時、今程、捻くれていなくて未だ若かったので、そういう風に思ったんですけど、でも、そのあとに起こったことを見ると、何か平和とかそういうんじゃなくて、結局、多国籍企業が地球レベル、地球規模で商売をしようという戦略だけが残ったと言うか、元々それが目的だったのかもしれないんですけど、それが何か、それだけになってしまって一向に平和になっていないじゃないですか。

それで結局、コンツェルンって言うか、多国籍企業が資本調達だとか人員の調達だとか、生産施設の拡張とかマーケティングの戦略で、やっぱりグローバリズムっていいものだっていう風に宣伝していると思うし、それに向かって進んでいる。

その時に何が邪魔になるかって言ったら、勿論、国境が邪魔になる。国境があれば伝統だとか、そのこの国なりの文化だとかがあるから、それも邪魔になる。だから伝統だとか国家だとか、そういうことを言うことってというのは悪しきことであって、これは、国家主義という悪いものであって民主主義とは反対のものだというような刷り込みが、ここ15年ぐらい、ずう〜と為されてきたような気がするんですよ。

私はドイツの事しか言えませんが、ドイツではそうだった。私は15年ぐらい前に、突然、政治家が民主主義、民主主義って言葉を常に使うようになったんですよ。で、それまで民主主義ばかり

主張するみたいな、そういうスピーチって、あまり無かったのに、民主主義っていう言葉が一人のスピーチの中に必ず出て来て、それが、いかに大切かという風に行く。だから、その頃から、そういう擦り込みっていうか、そういうものが、ちゃんと為されてきたんだなって、今になって思うんですね。

最終的にそれが今、かなり成功してしまっていて何が起きているかって言うと、勿論、国境なんかは崩れていますよね。移民なんか誰でもどうぞみたいな感じで、アメリカもそうですし、ドイツも結構、そうですよね。でも、そこは一応、せめぎ合いにはなっていますけど、そういう状態があって、やっぱり、いくら引き戻そうと思っても、100%は勿論、引き戻せないし、100%引き戻す理由も無いと思うんですね。

ただ制御できなくなっていて、どんどん国境がなくなることは既にもう避けられない状況になっている。そして、もう一つ何が起きているかって言うと、言論の自由が無くなっているんですね。そうじゃないっていう意見は今、全部、叩かれる、潰される、無視される、誹謗中傷される。もう完璧にそういう風になっていっています。

その状況が今、特にドイツは、今年と来年に大きな選挙を控えていますから、それまでに、どうにかして挽回しなきゃいけないって言って、右翼の力を削ぐ為に今、物凄く熾烈な攻撃が始まっていますので、そのことも、あとでお話したいと思っています」

水島「はい」

川口「以上です」

水島「今、右翼って言ったのは、所謂、『ドイツの為の選択肢』が中心ですか」

川口「勿論、それが中心で、それが今、全国規模で20%以上いっていますし、東ドイツ地域だったら30%超えていますから」

水島「そうですね」

川口「もう非常に脅威ですけど」

水島「うん」

川口「それ以外に、もう一つ、新しい右翼政党が出来るはずだったんですね。今、もう出来かけていたのに、そこの一番、トップの人を憲法擁護庁っていう国内向けの情報機関をやっている組織があるんですけど官庁ですよ。それが、その人を反民主主義者で監視対象にするって言ったもので、つい最近ですけど、今、それで、ちょっと止まっちゃっているんですね」

水島「うん、頓挫してしまった」

川口「だから本当に、そういう、もうギリギリのところの激しいせめぎ合いが今、起こっています」

水島「例えば、そういう人に、よく言うネオナチだとかね」

川口「うん」

水島「そういうレッテル張りとか、そういうことはしていないんですか」

川口「勿論、ナチだから反民主主義っていうのは、えーと…」

水島「ああ、そういうことになるんですね」

川口「そういうことなんです。今、憲法擁護庁の監視対象になってしまっているその人は2018年迄、憲法擁護庁の長官だった人ですよ（苦笑）」

水島「ああ、そうなんですか（微笑）なるほどねえ」

川口「そう。引き摺り降ろされたんです」

水島「凄いですね」

川口「はい」

水島「はい。ドイツがそういう社会になっているってことですけど。はい、では及川さん、お願いします」

及川「はい。グローバリズムっていう意味で言うと、私自身は5年ぐらい前からYouTubeで国際情勢を専門としたチャンネルをやっています、自分自身のポジションっていうのを明確にしようと思っていて、それはグローバリズムの問題を取り上げる反グローバリズムの立場ですと。これを明確にして、いつも番組をやる度に私は反グローバリズムの立場から話しますから、っていうことで、ある意味で偏った立場と言うか、一つポジションを決めている立場での発信をやっていたんですね」

水島「うん」

及川「それをやって去年の11月に、そのチャンネルがバンされたというか、全部、無くなりました」

水島「うん」

及川「無くなりました。このYouTube、ああ、今、これもYouTubeでやっている訳ですけど、このYouTubeの判断で、私のやっていたチャンネルは不適切であるということで、一瞬にして5年間分ですから、ほぼ毎日、動画を上げていたので…」

西村「凄い数ですねえ」

及川「千数百あると思うんですけど、全部消えたんですね。全部、消えたんです。ただ、それは事前に判っていたんですけど、その数か月前、半年ぐらい前からかな、YouTubeとの交渉があったんですけど、それが一体、何故かと言うと、YouTubeがグローバリズムだからですね。こんなことをYouTubeの番組で言っちゃいけないのかもしれないけど」

水島「でもそうですよ。うん」

及川「YouTubeがグローバリズム、YouTubeの親会社はグーグルです。グーグルって会社は民主党寄りというか、ほぼ民主党の会社です。ですから民主党の政策、アメリカ民主党の政策に対して反対の事を言っていたら、けしからんということになるんですね。」

今、川口さんから民主主義に対して反民主主義者っていうワードがあったんですけど、彼ら、グローバリストから見ると、正にグローバリズムに反することを言っていると反民主主義者になるんですね。じゃあ、それが一体、何なのかって言うと、ここで、あまり詳らかに言うと、本当に拙いので、あのう…」

水島「いや、大丈夫ですよ」

及川「大きくは3つぐらいなんですよ」

水島「うん」

及川「大きくは3つぐらいで、今から3年前にあった前のアメリカ大統領選挙。これについて、あることを言うと駄目ですね。これは駄目です。それから、もう一つ…」

水島「え、何、ちょっと、まあ、分からないから、おっかないところもあるけど、バンさるかどうかわからないけれど」

及川「(苦笑)」

水島「あのう、いや、トランプとバイデンの選挙の事ですか」

及川「そうです、そうです。2020年のアメリカ大統領選挙」

水島「それで、あれがインチキじゃないかって言うと駄目になるんですか」

及川「YouTubeのコミュニティ・ガイドっていうところにちゃんと書いてあるんですよ」

水島「ああ。あ〜…ああ、もう、それを言っているんですね」

及川「それは間違いなので、そういうことを言って世の中を混乱させるのは駄目ですよって、ちゃんと書いてある。私は、それを平気で破っていたので」

水島「はい、はい」

及川「それから二つ目は、やっぱり、あのパンデミックですね。パンデミックの予防治療として出て来た注射ですね。このことについて」

水島「うん」

及川「このことについて否定的なことを言うと、これも間違った医療情報を公に流しているっていうことで駄目なんですよ、これもコミュニティ・ガイドに書いてあるんです。それから三つ目は、やっぱりウクライナですね」

水島「うん」

及川「ウクライナの戦争。ウクライナの戦争について、やっぱり世界中が民主主義をあげてウクライナを応援しているんだから、それに対してウクライナの事を悪く言うようなことって、これは反民主主義者な訳ですよ」

水島「うん」

及川「これがグローバリズムだったんだなあっていうのを実体験致しまして、今、私は、どうしているかって言うと、このYouTubeってプラットフォームを使えなくなったので、Xっていうイーロン・マスクの、旧ツイッターですね。Xで同じように動画配信を毎日やっているのと、それから日本製のプラットフォームであるニコニコ・チャンネル」

水島「うん」

及川「ニコニコ・チャンネルで週1回、ニコ生っていうのをやっているのと、もう一つ、これも日本製ですけど、To Youっていうライブ配信専門のプラットフォームがあるんですね」

水島「うん」

及川「ここで、最近、新しい番組を始めて、この3つのプラットフォーム、このYouTube以外のプラットフォームで同じことを言い続けております」

水島「なるほどね。恐らく今のあれで言うと、我々は、ウクライナ問題から言うと、最初から、今言ったように、そうじゃないと。何が自由と民主主義の戦いだっていうことを、ずっと言っていたんでね。これはずっと今でも変わっていないですよ。ここは唯一、ずっと、まあ、多分、気が付かれたと思うけどね。だから多分、及川さんが個人がね、こいつはヤバい奴っていうね（笑）」

及川「(笑)」

水島「一個一個はね」

及川「はい」

水島「そうしたらパンデミックは確かにおっしゃる通り、うちも2度、バンされている。それから、もう一つ言うと、私が作った映画の中国の真ん中にある町ね。あのう…」

及川「題名、言っちゃいけない。(笑)」

一同「(笑)」

水島「・・・きんっていうね」

及川「はい」

水島「その所で日本軍が何をしたかっていうことを、私は真っ向から否定しているんですけども、それをやったらバンされて、うちは、その映画を2本作ったんですけど、それは今、別のサーバーにあげて、みんなが見られるようにしているんですね。だから少し似ているところがあるのかな(失笑)」

及川「似ていますね(笑)」

水島「札付きチャンネルになっているってことですね」

及川「お互い札付きだったということですね」

水島「そういうことですね。ただ真っ当に、ちょっと、やり過ぎたかも分かんないですね。うちの場合も、二度、こっちの系統(注射)私は、あまり口に出さない、これ(笑)」

及川「(笑)」

水島「こっち(ワクチン注射)の系統でやって二度、バンされて、2週間、2週間、3番目にやったら、今度警告が来て、全部バンする。つまり消しちゃう。20年間の膨大なソフトもね」

及川「う～ん」

水島「全部、消されるっていう状態になったんでね。そういう状態ですから、世知辛いというよりも本当に息苦しいね、言論の自由とか表現の自由が今、及川さんの例をあげるように本当にキツイ時代になっていますよね。ただ…」

及川「あのう、ちょっと、その点でね、今、西村先生が言われたグローバリズムの定義っていう意味で言うと…」

西村「はい」

及川「ちょっと、いいですか、もうちょっといいですか」

水島「はい、いいですよ」

及川「私自身は、そのグローバリズムっていうのを全体主義の支配と個人の自由の終焉という風に考えているんですね。これは自分のYouTubeのチャンネル発信しながら、こういう定義に収斂して来たんですけど。全体主義っていうものをどう考えるかという…」

水島「うん」

及川「ところが考え方が色々あると思うんですが、私は、やっぱり世界のパラダイム」

水島「うん」

及川「世界全体のパラダイムが、さっき川口さんが言われた民主主義っていうのが、今、世界のパラダイムであるという風に誰もが思っている。だからバイデンが大統領になると民主主義サミットとかがあって、民主主義国を集めてロシアとか中国の国を疎外しようというね」

水島「うん」

及川「しかし、本当に今、世界のパラダイムが、要するに今、この時代、この特定の時代を覆っている考え方が民主主義なのか」

水島「うん」

及川「実態は民主主義のフリをした全体主義じゃないかと。その民主主義とかって言っている国ほど全体主義じゃないですかっていうのが、私の問題意識です」

水島「なるほどね」

西村「及川さんね、あのう…」

及川「はい」

西村「お気づきになっているかどうか分かりませんが、最近、この5年間、ジャーナリズムが全体主義という言葉を使わなくなってきた。それで代わりに権威主義になっている」

及川「ああ、権威主義ね」

西村「だから、おかしいんですよ」

及川「おかしいですね」

西村「つまりね、Totalitarianismってものがあるのに、それを使わないんですよ。異常でしょう」

及川「似ているけど凄いソフトにしていますね」

西村「だから、そういう言葉のマニピュレーションをやっているんですよ、そういう操作をね」

水島「そうですね。はい。この問題は、やっぱり凄く大事な話でね、もう一つ、さっき、西村さんが言ったように、じゃあ、日本って何処が違うのか。民主主義なのか全体主義なのかという問題を含めて、もう一つは『善悪の彼岸』っていうね、私から言うとハンチントンも言ったし、色んなことも言ったんだけど、ソロスも言ったかも分からないけど『善悪の彼岸』って、つまりイデオロギーとか思想とか哲学とか違うものが、実は日本にあるんじゃないかって言うのも、今日、グローバリズムっていうのは実は、その日本って何だっていうことを問うことでもあるじゃないですか。

その時、やっぱり善悪とか、そういうもの、まあ、ニーチェじゃないですけど、『彼岸』。つまり価値観とは何かっていうものところから、別の所にアジアの、日本の、その文化とか、もしかしたら、あるかも分からないっていうのがあってね、だから今言ったグローバリズムに根本的に対立するもの。

ただ政治的に、それが進まない、今、言ったように、非常に弱い存在でもあるっていうか、その典型が皇室だと思うんですけどね。あれを強い存在と見るか、強いていうか、強かな、しなやかな確固としたものとして、私なんかは見るんだけど、ただ、これを、いくらでも変えることが出来るという人達も居るし、これを言ったら日本論になるので、皇室論から何から全部になっちゃうんで拙いんだけど、今、せっかく及川さんが言ってくれたので、この問題は日本ということを考える意味で、とても大事ななあと思っているので敢えて言わせて貰いました。じゃあ、モーガンさん、お願いします」

モーガン「いつも誘って戴いて有難うございます。社長、恐縮ですが、我儘を言っちゃって宜しいですか」

水島「はい。どうぞ、いくらでも（笑）」

モーガン「今日、皆様と一緒に誘って下さって、それは本当に身に余る光栄ですので、私は伊藤貴先生の前に発表することは出来ません」

一同「（笑）」

モーガン「もし宜しければ、伊藤先生に譲り…」

水島「伊藤さんが終わってからと」

モーガン「えーと、宜しいですか」

水島「伊藤さん」

伊藤「はい」

モーガン「申し訳ございません」

水島「今、そういうモーガンさんの話なので、伊藤さんからおっしゃって下さいますか」

伊藤「えーと、ですねえ。グローバリズムに関して、僕は勿論、グローバリズムに反対しているんですけども、大きく見ると二つの原因があって、この二つの原因は分けて考えた方がいいと。一つ目は過去250年、もしくは270年間に起きて来た人類の政治思想と価値判断が、どのように変わって来たかと」

水島「うん、うん」

伊藤「僕は、過去250年間、もしくは270年間、特に欧米諸国ですけれども、政治思想と価値判断が変わって来たことが必ずしも進歩してきたとは思っていない訳ですね」

水島「うん」

伊藤「そういう視点から、過去2世紀半の人類の政治思想の変化が、本当に我々が肯定出来るものであるのかと」

水島「うん」

伊藤「もう一つは、最近、三十数年間、32年、33年間に起きて来たアメリカの暴走ですね。アメリカと、所謂、アメリカニズムによる暴走で、今の国際社会、国政政治っていうのは、はっきり言ってアメリカが暴走しているんです」

水島「うん」

伊藤「所謂、17世紀のウェストファリア体制とか、それから、19世紀初めのウィーン体制だったら絶対に起こり得ないような非常に愚劣な覇権主義政策をアメリカが実行して、自分達の経済システムと軍事覇権と、それからデモクラシー、デモクラシーと叫びたてる非常に偽善に満ちた国際政治をやって、結局、他の国をレジーム、要するにね、アメリカが民主主義、民主主義って言いたがるのは他の国をレジームチェンジする為の口実なんですよ。

アメリカにとって気に食わない国があると、この国は民主的ではないと、それから、人権問題があると行って攻撃してCIAと国務省が裏で工作して、それで相手をプロボク、挑発して、それで戦争に持ち込むと。これが過去32年間のアメリカ外交のパターンだったんですね。

勿論、経済面では、アメリカの大企業とウォールストリートの金融業者が世界中で短期間の内に巨額の利益を得られるようにしていく。こういう過去32年間、33年間のアメリカの暴走によるグローバリズムと、それから1750年ぐらいから関わってきた政治思想の変化によるグローバリズム現象というのは、ちょっと質が違う問題で、これは分けた方がいいと思うんですね」

水島「うん」

伊藤「あとで、もうちょっと長く説明しますがけれども、例えば18世紀の後半からフランスを中心に民主主義と平等主義、それから自由主義は素晴らしいものであると。この3つを世界中に広げれば、いい世界が出来てくると。人類は、もっと素晴らしい生活が出来るようになると。こういう議論が普遍的なものだとみなされて、それでデモクラシー、リベラリズム、イガリタリアニズム、イガリタリアニズム (egalitarianism) っていうのは、平等主義です。これは世界中の人が受け入れるべき基本的な政治思想であるという風な議論が主流派になってきた訳ですね。

僕はモーガンさんと同様に少数派ですから、主流派じゃない訳です。僕は自由主義、民主主義、平等主義というものは、多分7割ぐらいは正しいものであると。However、あとの3割は民主主義と自由主義と、それから平等主義は間違っていることが多いんですね。だから、この3つのイデオロギーを全ての場合に盲目的に適用しようとする、必ず問題が起きるんです。

要するに人間は、っていうか、何処の国、これねえ、全ての国に言えることですが自由主義、民主主義、平等主義を100%実行すると社会が壊れてしまうんです。文明が壊れてしまうんです。過去2500年間の文明を見ますと、自由主義、平等主義、それから民主主義では決して解決できない要素が、どの社会にもあるんですね」

水島「うん、うん」

伊藤「そういう議論を避けて来た」と

水島「うん」

伊藤「ジェイソン・モーガン教授と僕が視点を同じくするのは、ジェイソンはカトリックの右派ですから、カトリックの右派というのは、今言った民主主義と平等主義と自由主義を実行するだけでいいのかと過去250年間、言って来た訳ですね。リベラル派の知識人から目の敵にされてきたんですけども。僕はキリスト教徒ではないんですけども、仏教と儒教と、それからキリスト教神学とギリシャ哲学と、この4つの文明の源流ですね。非常に文明の価値判断の基になっている価値規範ですね。僕は、この4つとも好きなんです。

この4つの文明の流れから見ると、最近250年間の自由主義、民主主義、平等主義を実行すれば、それで上手くんだという議論は、あまりにも Shallow Minded、あまりにも浅はかですよ。そのグローバリズムを見ると、この非常に浅はかな要素、そんな簡単で軽薄なことを言っていていいんですかという要素が強いんですね。

ですから、繰り返しになりますけれども、過去250年、270年間の政治思想なり価値判断の変化が本当に正しかったのかという問題と、それから、過去32年間のアメリカの覇権主義外交の暴走。これにどう対処するかという、二つの問題が絡まり合った問題であると思います」

水島「伊藤さん、今の30年間と250年の話で言うと、250年の結果が今の30年に繋がっているという風に、アメリカにとっては考えている訳ですか」

伊藤「ヨーロッパの場合はそうですね」

水島「うん。なるほどね、はい」

伊藤「今のヨーロッパ人は、もう価値判断能力を失っているんですけども、これは、やっぱり18世紀の後半から、ヨーロッパ人が馬鹿なことを始めたから、こうなったんだという風に思うんですね」

西村「フランス革命だ」

水島「うん」

伊藤「しかし、アメリカの覇権主義っていうのは、ちょっと質の異なる別の問題で、アメリカの外交政策と戦争政策を仕切っている、所謂、ネオコンの連中ですね」

水島「うんうん」

伊藤「ネオコンとディープステイトっていうのは、自分達が悪いことをやっていると知っていてやっているんです」

水島「うんうん、うんうん」

伊藤「だから正義感、道徳観に満ちたようなことを言いながら、実は、非常にあくどいことをやると。それで、あくどい事をやっているねと指摘されても、全く顔色を変えずに、それがどうしたと。So What?と問い返してきて、全く反省しないと」

水島「そうですね」

伊藤「これはナイーブでお馬鹿さんなヨーロッパ人とは、ちょっと違うんですね。だから、これはワシントンに住んでいる僕から言うと、この問題は別、質が違った問題だという風に見えます」

水島「なるほどね。有難うございます。これは本当に文明論の問題でもある訳ですね。じゃあ、モーガンさん、引き継いで」

モーガン「有難うございます。すみません。失礼致しました。『グローバリズムの現在2024年』というテーマで、私は武者震いという状態で、このスタジオに参りました」

一同「(笑)」

モーガン「先程、西村先生がおっしゃったこと、及川先生もそうですけれども、情報統制が今、非常に深刻化な問題になっていて、アメリカではドイツに似ているような問題が今、発生しております、January 6とかJ 6っていう議事堂に勝手に入って暴動を起こしたとか、そのようなフェイクニュースが流れていて、実際に、それを挑発したのはFBIなんですよ。それを企画してバス何台も動かして作業員をその場に運んで、J 6というデマをその場で起こした訳で、それは全て作り話です。

J 6とか民主主義に対する攻撃とかという言い訳をもって、本当のアメリカ人、パトリオットを続々と刑務所に入れていく。私の国の政府がファッショ化したと、この場を借りて言いたいです。このあとグローバリズムとは何かと、私は人物3つをあげてグローバリズムは何かという定義の代わりに、この人物は代表的にグローバリズムの事をやっている。

あと情報統制は、メディアが全体主義を使わなくなったのは、日本のメディアもアメリカのメディアもディープステイトの所有物だからです」

一同「うん」

西村「ああ、そうですね」

モーガン「だから使うと言われて、命令されたから…」

西村「使っていないですよ」

モーガン「そうですよ。その通りです」

西村「何か恐ろしいよ」

モーガン「そうですよ。そう。そうですよ。急に民主主義という言葉が出るとか、みんなが口を揃って急に全体主義という言葉が消える」

西村「消えるんですよ」

モーガン「それは偶然じゃないですね」

西村「もう僕は、ああ、これは意識的、意図的だなあっていう風に思っていましたよ」

モーガン「絶対、そうです。名前は敢えて言わないんですけど、訴訟は特に必要ないのですけれども、私は拝米タイムズはCIAの機関紙だと思っていますよ。あのような雑誌の記事を読めば、いやあ、これはワシントンの誰かが書いて、今、続いている検閲官制度がその雑誌を担当していると思っています。情報統制、トランプとは何か。トランプは、その情報統制をぶっ壊してくれる人物ですよ。だから重要です。だから、大統領の座に二度と就くことは、絶対に許さない。

ファニー・ウィルス (Fani Wills) というフルトン郡の地方検事が、自分の特別検察官、ネイサン・ウェイド (Nathan Wade) と浮気しているんですよ。二人共、トランプが選挙に干渉したっていうような疑いがありまして、トランプを起訴しようとしているんですけども、二人共がディープステイトのやり手で、しかも愛人ですよ。愛人同士がトランプを攻撃している。それは民主主義を擁護している人物ですよ」

水島「そうですね」

モーガン「日本国内でも情報統制がかなり進んでいて、この間、社長が取り上げて下さった拙著、ラムザイヤー先生と二人で書いた本がございます。慰安婦問題とは何か」

水島「ああ」

モーガン「慰安婦問題という大きな嘘と、はっきり英語で書いた訳です。日本国内でも、それは国民にお知らせしたいと思って、例えば Japan Review という国際日本文化研究センター、京都の日文研が出している雑誌がございます。その編集長に、この本の書評はいかがですか、これは範囲外ですと。慰安婦問題って Japan Review の範囲外ですかと。何処が範囲外ですかと。具体的に理由を求めて黙殺です。何回も。そのセンターにも連絡すれば何も返事が来ない。具体的に慰安婦問題を取り上げている日本の歴史が、内容の半分ぐらいになっている。あとは日本研究をやっている、所謂、学者ですね、偽り学者が情報統制をやっている。そのような内容は何処が範囲外ですかと」

水島「うん」

モーガン「因みに、その編集長は白人、外国人ですよ」

水島「うん」

モーガン「外人です。情報統制やっているのは殆ど外人が担当しているんですよ。あと、日本の外国特派員協会があるじゃないですか。そこでも記者会見をやりたいと言っても、却下です。理由は何ですかと。理由は全く教えてくれないです。上は外国人が担当しているじゃないですか」

水島「あっ、あれですか、モーガンさんが、それは調べて…」

モーガン「私じゃなくて藤岡信勝先生が…」

水島「ああ、藤岡さんね。はい」

モーガン「記者会見をしたいと、ご丁寧にパーフェクトな英語で申し込まれたんですけども。ああ、ごめんなさい。委員会で、これを検討したんですが、NOという返事が来てと。じゃあ、何故ですかと、ご丁寧に返信したら、全く何も…」

水島「返事、なし」

モーガン「返事、なしと。具体的な理由を教えてくれないようです」

水島「なるほどねえ」

モーガン「それは情報統制のリアルですね」

水島「うん」

モーガン「民主主義の反対が言論の自由ですよ」

水島「うん」

モーガン「民主主義はデモクラシーと言うとデマクラシーの方がいいじゃないですかと」

一同「(笑)」

水島「うん」

モーガン「民主主義なんて無い訳ですよ」

水島「うん」

モーガン「民主主義、言論の自由があるんですが、民主主義って、それは国家の言い訳に過ぎないと思います」

水島「うん」

モーガン「じゃあ、人物3人を取り上げて民主主義のグローバリズムのリアルを説明したいと思いますが、まずローマ教皇、ポープ・フランシスっていう気持ち悪いアルゼンチンの人」

西村「う～ん、あれは酷いねえ」

モーガン「酷いですよ。あの人はコミュニストで、最近、フィデューシア・サプリカンス(Fiducia Supplicans)っていう勅語みたいなものを出して、まあ、書簡みたいなもの」

水島「うん」

モーガン「要はカトリック教会の神父が同性愛のカップルを祝福することが出来るって、それはカトリックでは、同性愛とは罪の一つですので、つまり神父が罪を祝福するっていう全く矛盾していることを命令しているんですよ。フィデューシア・サプリカンスっていうことは、お隣の街角のカトリック教会が、ただのゲイバーに成り下がったことを解って戴ければいいと思います。

あのカトリック教会は何かって言うと、もう国際的児童性虐待ネットワークに過ぎないんですよ。何処の国でも何万人の子供が性虐待されたかという報告書が出ているんですよ。それを全く反省しないで、もっともっと、ゲイ、ゲイ、LGBTを推して、推して、日本の虹色の東京大師教区の菊地功大師教はLGBT推し推しですよ。本が出ている程、あの人が推薦しているLGBTの本。この間、ダボスではグローバリズムの会合があったじゃないですか」

西村「うん」

モーガン「フランチェスコ教皇がその会合に特別なメッセージを送って、あなた方の会議を祝福しますとか(失笑)」

西村「終わりだね」

モーガン「ええ、それ終わりですね」

西村「え～っ…」

モーガン「カトリック教会は、伊藤先生におっしゃって戴いたように私はカトリック右派、保守系じゃなくて右派ですね、私は右派です。カトリック教会の教えはいいと思うんですよ。でも拙著の中でも書いたんですけども、途中からカトリック教会がグローバリスト教会になったんです。もう宣教師もそうですけれども、それがひとつ。それで希望の光としてはアフリカの司教達が、それに反論しました」

西村「反論しましたね」

モーガン「いや、従いませんと。つまり気持ち悪い白人が嫌なことを言えばNOと言える訳ですよ」

水島「うん、うん」

モーガン「NOとハッキリやりませんと言って。それは格好いいなあと思って、そのアフリカの司教達は大きな意味があると思います。その気の狂っている白人に対してはNOと云えばいいじゃないですか。NOと。従いませんと。

二人目。知っていますか、1か月以上前、この番組に出演させて載いてアンドリー・グレンコ（Andrii Gurenko）っていう人を名指したんですけども、私に対して一切、反論が来ないんですよ。グレンコ。じゃあ、再びで失礼ですけども、グレンコにメッセージがございます。グレンコね、この日本が、あなたの、どうしようもない国に8兆円もあげているというニュースを見ているんですよ。8兆円。その何割がゼレンスキーの懐に入るかと。まず、それを教えて載きたい。何割が、我々の血税ですね、私だけじゃなくて日本国民の税金の8兆円が、あなたのグローバリズムのやり手のどうしようもない国に流れているんですよ」

水島「うん」

モーガン「それは腐敗のブラックホールに入っているじゃないですかと。グレンコに説明して載きたい。それが一つです。二つ目、グレンコ、お前はね、いつも手を伸ばしてね、お金を頂戴と物乞いしているじゃないですか。日本が困った時は、あなたは動いたんですか。この間の能登半島の地震があったじゃないですか。津波があったんじゃないですか。あなた、行ったの。グレンコ。いつも助けて、助けてと日本人に言ってお金を頂戴と物乞いしているんですけども、あなたは能登半島に行ったんですか。是非、能登半島に行って下さい。能登半島に行ったら、そこの人々に対して説明して下さい。何故、この能登半島では未だ電気が復旧していない。未だ水が流れていない。何故、この日本が、この能登半島に8兆円を送らないで、あなたの、どうしようもないグローバリズムの代表的な国に送らなければならないんですかと。その能登半島の人々に、それを説明して下さい。福島にも行って下さい。グレンコ。それが二人目です。アンドリー・グレンコという人はグローバリズムの代表的な人間です。

そのウクライナという詐欺はね、もう賞味期限を超えているんですよ。ウクライナなんて拝米保守が復興ビジネスを狙っている、それは明らかですけども、ウクライナと言えどどうでもいい訳ですよ。グローバリスト、私の国を乗っ取っているサイコパスが、あの国をやりたくて隠れ蓑として使って、プーチンに対して戦争を仕掛けたんですよ。

何故、私達、日本人、私達、アメリカ人、私の国もあなたの国に膨大のお金を送っていますよ、グレンコ。それを返すつもりですか。ウクライナ人は、みんな、寄生虫？あなたは、いつも世界からお金、お金、お金、返すつもりですかと聞きたいです」

水島「うん」

モーガン「グローバリズムってお金のブラックホールです。3人目、ごめんなさい。青山繁晴さん。前回、青山繁晴さんのお名前を取り上げました」

水島「うん」

モーガン「会ったことはないです。でも彼の御本を送って下さった人がいらっしゃいますので、もし、青山繁晴さんが総理大臣になったら、日本は良い方向になると、そのようなコメントを載せておりますが、ちょっと本の中から読み上げさせて載きたいと思います。

『ただ、たった今、第二次大戦後の世界秩序が壊れつつある。究極のエゴイスト、Pulling America First。アメリカを第一に置く、押し出すと言いつつ、実は、Pulling Myself Firstと自分を第一に押し出すのはミスター・トランプを大統領選で驀進させるアメリカは真っ先に壊れていく。トランプさんが最終的に大統領になってもならなくても、本当は関係なかった。天才的破壊者ともいうべき、この人物を救い主と拝める民衆の姿が、世に現れただけでアメリカ合衆国の民主主義は一旦、終焉を迎えている』ということを書いている青山繁晴が総理大臣になっても何が変わるんですかと聞きたいです。ちょっと写真になっていて見せられないんですけども、こういう写真がございます。

青山繁晴先生の御本の中に、自分がハワイ真珠湾の米軍インド太平洋司令部でアキリノ司令官と胸の奥を開き、通訳を挟まずに議論したと。普通、自分の国を占領している外国の敵の軍の代表者との2ショットを自分の本の中に掲載しないですよ。それ、おかしいです。

アルジェリア、ベトナム、ブルキナファソ、ニジェール、南アフリカ、それから、ハワイの歴史を勉強して下さい、青山さん。白人が、いくつかの国で気の狂っている体制を植民地として植えているんですよ。あの米軍は、ハワイを未だに占領している」

水島「うんうん」

モーガン「その米軍の代表者と会って、何が変わるんですか。貴方はいつも日本の独立とか訴えているんですけども、あなたの党がL B G T法案を出したんじゃないですか。あなたは、その時、欠席したと言われているんですけども、それではどう変わったんですか。党に残ったじゃないですか。あの自民党はV Cジャポンですよ。V Cジャポン。自分がパトリオットと言っている政治家、最も保守的な政治家ってという評判のある人が、自分の本の中に占領軍の人と会話をしましたという話を掲載できるのは、普通に考えるとおかしいですよ。

南北戦争のあと、フィリップ・ヘンリー・シェリダン (Philip Henry Sheridan) っていう将軍が私の州でルイジアナを占領していたんですけども、その当時は、写真、カメラ、あまり、こう進化していませんでしたけれども、もし、本を出そうと思ったら、シェリダンさんと2ショットの写真を私の本に掲載するはずがないじゃないですか」

水島「うん」

モーガン「これは敵なんです。敵です。こうやってトランプさんは、どういう人物かって言うと、1年ぐらい前、この番組で出演させて載せて、私はアメリカ帝国を終わらせたいという風なことを言って、それに対してワシントンの特派員が、私に対して中国のスパイにも聞こえるとおっしゃったんです」

水島「ああ、古森さんだな（笑）」

モーガン「はい。あなた、中国のスパイにも聞こえる」

水島「(苦笑)」

モーガン「貴方はミニGHQとかとおっしゃって戴いたんですよ。私の国が8年間、この国を占領している。それは申し訳ない事です。私の国を取り戻したい。帝国化した私の国を普通の国にさせたい。アメリカ人として、そういうことをやる権利が私にはあるんです。何故、私とトランプの支持者が自分の国を戻して下さいと日本の拝米保守に言えば、お前は中国のスパイに聞こえるとか、お前はミニGHQって言われますが、私はアメリカ人として言う権利があると思うんですよ。

アメリカ人として、この美しい日本を占領しているのを止めたいと思います。止めさせたい。総督府を帰国させたいと思うんですよ。総督府にインタビューするのではなくて、具体的に総督府を帰国させたいと思うんです」

水島「うん」

モーガン「グローバリズムは、この国の拝米保守の空気にもなっているし、そういう雰囲気にもなっています。チャンネル桜は宝物です」

水島「有難うございます」

モーガン「本当に、真正面から気持ち悪いグローバリストと色んな角度から戦っている、このチャンネル桜と皆さまのご存在は本当に宝物だと思っていて、もうグローバリズムって、どう言ってもいいかと、あのう、色んな定義が出来ると思うんですけども、とにかく日本は独立していない。そこから始めたいと思います。はい、以上です」

水島「はい。有難うございます。私からも、これを企画したところで、ちょっと言わせて貰うと、一番、興味があるのは、このグローバリズムというものは一体、何処から、このモチベーションと言うか何て言うの、グローバリズムをやろうというね、さっき伊藤さんからも平気で金儲けの為だったら戦争

だって何だってやっちゃう人達だ。いや、その通りですよ。この連中っていうのは一体、何をベースにそういうものを始めたんだろう。

つまり人も国も民主主義とかインチキな価値観で纏めて、違う奴は、みんな反民主のところみたいなね、そういう風にやっちゃうんだけども、そういうものは何処からね、まあ、もっと言うと、お金とか唯物論的なね、金が全てみたいなね」

モーガン「はい」

水島「それで世界を支配するとか、ただ、そういう価値観っていうのは一体、誰が何処からベースになっているんだろうって、さっき言った260年間ぐらいの間から、政治思想とか哲学が変わって来たけれども、今、そこへ、なんだ、行き着いたのはそこかい？っていうね。もう、ひたすら金とね、あ、生存の、やったって何だって金儲けの為にやっちゃう。人の不幸なんか構わないというような極めて低劣な価値観っていうのかな、道義性とか道徳性とか、そこまで落ちちゃっている。でも、それが今、大手を振っている。これは何処から来たんだろうっていうね」

西村「それは、もう本質ですよ」

水島「いや、だから本質なんでね」

西村「そうなっちゃう。だから…」

水島「うん、そう」

西村「今、道義性みたいなことをおっしゃいましたけど、道徳とおっしゃいましたよね。丁度、昭和16年に真珠湾攻撃の1週間前、京都学派が座談会をやりましたね。『世界史的立場と日本』という座談会をやったんですよ。それで、そのあと2回、座談会をやって、中央公論でやって、それで昭和18年の2月に単行本で出ました。その本で、高坂正顕、高山巖、鈴木成高、そして西谷啓治っていう歴史学者や哲学者、みんな、西田幾多郎門下ですけど、彼ら4人が話し合った中で盛んに出てくるのが『もらいし』という言葉が出て来るんですよ。その道徳性」

水島「うん」

西村「世界史というものは、欧米人にとってよりも日本人にとっての方が物凄く重いものがあるね。あと世界史の哲学ということを考えると、そういう発想っていうのは日本にとっては凄く深刻なんだけど、欧米人には全然、そうじゃない。何故かと言うと、世界は、もう自分達としか思っていないで…」

モーガン「そうです」

西村「日本から見ると欧米は世界だった訳ですよ。それは1853年にペリーが来てからからそうだった訳で、まあ、それまではロシアも来ていましたけどね。それで結局、何を言いたいかって言う、あのう…」

水島「そこだよ（笑）」

一同「（笑）」

西村「その200年間でね、さっき、おっしゃっていたフランス革命から、ずっと始まったものの帰結が、そういった今、水島さんが言ったようなことになっちゃったんじゃないかと思えますよ」

水島「いや、だからね…」

西村「ええ」

水島「その冒頭に『善悪の彼岸』と言ったんだけど、価値観とかフランス革命とかも色々あったじゃないですか」

西村「はい」

水島「自由、平等、博愛とかね。こういった色んな理念とか哲学っていうのが、さっき、伊藤さんが言ったようにジグザグ、ジグザグして、あっち行ったり、こっち行ったりして来たけども、結局、行き着いたのは戦争と、第一次世界、第二次世界大戦」

西村「ええええ、はいはい」

水島「そして、今、こんなに乱れ切ったと言うか墮落しきったようなね、こういう社会になっているっていうのはね…」

西村「それがファシズムになっちゃうんですよ」

水島「うん。だから…」

西村「だから『リベラル・ファシズム』っていう本があってね」

水島「うん」

西村「ジョナ・ゴールドバーグっていうユダヤ人で、実はネオコンの人だけど、彼が書いた本で…」

水島「だから、ちょっと、私が言いたいのはね」

西村「はいはい」

水島「そのファシズムとか、そういうものも含めて、そういう思想やイデオロギーや哲学自体が、もう通用しなくなっている社会が来ている。と言うのは、まあ、大袈裟に言うと、ニーチェが『神は死んだ』って言ってね、カソリックの方には申し訳ないけど、だけど、そういう意味で耐えるべきものが無くなったようなね、じゃあ、ヨーロッパが何を選んだかって言うと、戦争と、ある意味で言うと、今、言っただけなら民主主義とかいう名の下のね、こういうものを選んできている。

それにくっついて我々の国も民主主義だなんだって言ってね、一緒にやっている。でも、それがもう全部に否定されて、イデオロギーとか通用しないからっていうことが、世界中、明らかになって、それで一つ出ているのがお金儲けの為には何だってやる。人を支配する。

もう何だってやるっていうことが来ちゃっているんじゃないですかというね。日本の価値観っていうのは、はっきり言えば『八紘一宇』ですよ。家族の様に、みんなが、それぞれ、暮らしていこうっていうね。実は、こういう価値観があると思っているんですよ。まあ、これは、あまり細かく言うと変な風になっちゃうからここでやめますけど、こういう価値観の日本の中にも、それが無くなっている。

我々の国が、もう様変わりしている。もっと言うと一番、解り易いのは、何度も言って、失礼だけれども、元旦の正論欄っていうのかな。そこで例の文芸評論家の人が言っていたけど。ちょっと名前を忘れちゃったんだけど、ごめん。この人が『戦後78年間は既に伝統となっている』と。お前は伝統っていうものを、そういう風に考えているのかっていうね」

一同「(失笑)」

水島「だから、それも伝統として見直さなきゃいけない。今、必要なのは権威であるみたいだね。何だ、こいつ、これが日本の保守かいというね。保守と称する文芸評論家かいつていう感じで、それも申し訳ないけどボロクソに言っちゃって、腹立つことに小林秀雄を出すんですよ。こういう人の名前を出しているけど、それは全然、違うと思いますよ」

モーガン「はい」

水島「ところが、こういう風になっている。でも、これが、さっき言った今の戦後の日本の価値が蔓延している一つじゃないかなというような、まあ、ちょっと、あまり長くなると良くないんで…」

及川「あのう、今、水島社長が言われたモチベーションっていうところですけど」

水島「うん」

及川「グローバルリストがモチベーションがあるとしたら何かなあと、私も、そこは一番、関心があるところで、ある意味では支配欲」

水島「うん」

及川「私は、グローバルリストを具体的にイメージするのに凄くいいなあと思うのはジョージ・オーウェルの『1984』」

水島「ああ、そうだね」

及川「Nineteen Eighty Four ですね。あの小説の中で描かれているのは、正に世界が全体主義の国家3つぐらいになってしまって、その国家の中に居る国民っていうのは、みんな、飼い慣らされた民衆ですね。何に慣らされたかと言うと、自分で考えることをしなくなる。自分で考えちゃいけない。その為に言論も勿論、統制されるし。自分で考えなくなった。さっき伊藤先生が言われたように、ヨーロッパは今、本当に自分で考えなくなってしまったとしたら、正に、その通りで、じゃあ、飼い慣らされた国民というのは何かと言うと奴隷なんですよ」

モーガン「奴隷だ」

及川「結局、全体主義っていうのは奴隷制を作りたい。だから奴隷階級を。だけど、奴隷と言っても、本人達に自分が奴隷だと思わせたら拙いから、程々の幸せを持たせながら、トップに立ってエリートって言われている人達は結局、その支配している。私は何かね、このモチベーションが悪魔的だっていう風に凄く思いますね」

水島「支配ね」

モーガン「そうなんです。悪魔です。家畜を飼っているかのような感じです」

及川「うん」

モーガン「ほんと、そうです」

西村「皮肉なことに、今、『1984』っておっしゃいましたけど、1984年に、丁度、アップル・コンピュータがスーパーボールの時にね…」

モーガン「有名なCMだ」

西村「有名なCMがあるでしょ。あれはアップルがつくったんですよ。あの巨大なスクリーンにアスリートの女性がハンマーを投げつけて割るじゃないですか。その瞬間、奴隷のように行進していた大衆達、みんなが我に返るっていう、あのCMがあったんですよ。そういうものをアップルがつくるんだっていうメッセージだった訳ですよ。あれは、正に『1984』の悪魔が、要するにゴッドファーザーですよ。それがスクリーンに居た訳です。それを割るハンマーがアップル・コンピュータだったのに、それから30年、40年経って、正に40年ですね」

水島「うん」

西村「今、そっち側になっちゃっている」

及川「そっち側になっちゃっているんですね」

モーガン「God Father の椅子を替えただけ」

及川「そうそう、そうそう」

西村「替わっちゃったんですね」

及川「だけど、その『1984』が今、世界で売れているんですね」

水島「うん、うん」

及川「今、世界的なベストセラーになっていて、やっぱり、人々が何か本能的に感じているんだと思う」

水島「それは本当に今言った日本とか、さっき川口さんが言ったドイツの状態、また逆に、今、聞いているおきたいと思うんですけどね。その細かい状態って言うかね。つまり選択肢と、もう一人、さっき監視対象になってくれなくなったっていう話。一体、ドイツっていうのは、どのような言論の自由、あれが前からナチスの問題について言うとね、絶対、駄目だっていうのを聞いていたけれども、それ以上に、もっと強まっている感じがするんですけどね」

川口「もう今の与党が社民党、自民党、緑の党の三党連立ですけど、その3つを合わせても支持率が31%ぐらいしかいない状態で、もう惨憺たるものですよ」

水島「はい」

川口「それで野党の中で、今一番強いのが、キリスト教民主同盟、社会同盟の連合体ですよ。それが30%ちょっとあって、第二党になっているのがドイツの為の選択肢、AFDという党ですけど。それが丁度、10年前、2013年に出来た党ですよ」

水島「うん」

川口「それで、最初は経済学者が創った党で、当時、EUの金融政策に反対して創った訳です。だから全然、右でも左でもなかったんですよ」

水島「ああ」

川口「それが勿論、小さな党だったんですけど、その2年後の2015年に、メルケル首相がシリア難民を無制限に入れ始めた時に、そんなことをしちゃ駄目だって凄く大きな声をあげたのがAFDだったんですね」

水島「うん、うん」

川口「そこで凄く注目されたんですね」

水島「うん」

川口「それ以来、色んなところからも叩かれたり無視されたり、もうメチャクチャされているけれど、それで、まあ、上がったたり降ったりはしていましたけれど、最近になって、やっぱり凄くしっかりした岩盤支持層みたいなのがあって、それで今、もう当時、最初に、その党を創った経済学者なんていうのは、もう居なくなっちゃったんですね」

水島「うん、うん」

川口「またハンブルグで教授をやって戻っていますけれど、その人は居なくなったり誰かが入って来たり、また喧嘩になって出たりって、まあ、新しい党って、そういうことが、しょっちゅうあるんですけど、今、居るのは結構、右派の硬派みたいなのが残っているんですけど、でも言っている事は凄く、別にナチでも何でもなくて、それこそドイツの伝統をちゃんと守りましょうとか、ドイツの国境はちゃんと守りましょうとか、それから難民は本当に困っている人は勿論、庇護しますと。

それから、移民を入れるんだったら、こちらが本当に必要としている人を入れましょう。皆さん、勝手に入って来て下さいっていうのは、おかしいっていうことを言っているし、それからエネルギー政策なんて、本当に一番、まともなことを言っていると思うんですよ」

水島「うんうん」

川口「それで原発は、とにかく早く動かした方がいいと。再生可能エネルギーを利用するのはいいけれど、増え過ぎたら大変なことになるから考えなきゃいけないとか、あとは戦争、今、やっている制裁ですわ、経済制裁。ロシアに対する経済制裁は、もうドイツを弱体化するだけだから、だから、もう直ぐに早くロシアと交渉してガスをもっと入れなきゃ駄目だとか色んなことを言っていて、どれもいいんですけど、これって普通の人達の耳に全然、入らない訳ですよ」

一同「ああ…」

川口「というのは、もう普通のトークショーの番組には絶対、出して貰えないし…」

一同「ああ～…」

川口「それからインタビューもして貰えないし…」

一同「ああ～」

川口「私みたいに、その党の創っているチャンネルに入って見れば勿論、全部、出てきますけれど、普通の国民は、そんなことはしないから普通の国民ですよ」

水島「うんうん、うんうん」

川口「だからニュースにも出て来ないし、そこまで強い党になって、州議会なんかでは、東の方の州議会では、かなり強くなっているんですけど、それでも何かコメントを貰うという時も全然、駄目で、ただ、たまに国会でのスピーチなんかだと切り取って、とても、偏向したような報道になっちゃう時が多いんです。まあ、そういうのがあったんですよ」

水島「うん」

川口「それで、その人達が今、凄く強くて、みんなが困っている訳ですよ。その困っているのが与党だけだったら未だ解るんですけど、次の選挙で負けちゃうと困るって言うんだったら解るけど、今、野党であるCDU、キリスト教民主同盟も、とにかく全党が全部一緒に反対しているってことってというのはね、今迄の与党と野党の攻防なんていうのは、みんな、茶番だった訳ですよ。

みんな、元々の利害関係とかってというのが、ちゃんとあって、そのまま戦後、続いてきた体制を壊しかねない『ドイツの為の選択肢』が邪魔な訳です。だから、あいつが来ないようにというので、全部が一緒になってやっているんですよ」

西村「日本と似ているじゃない」

川口「あの党は極右だから、だから絶対に連立しちゃいけないって言う風に言っているんですよ。でも、それは今、特に州議会なんかはそうですけれど、30%以上取られて、そこは連立しないってなると、他に残っているのが、みんな、団子になって一緒にならないと政権を取れなくなる訳ですよ」

水島「なるほどねえ」

川口「今度、それが来年の総選挙でも、そうなり兼ねないから、とにかく潰さなきゃいけないっていうのが今の状態ですよ」

水島「なるほどね。う～ん」

川口「そして、この間、つい最近、1月の話ですけど、突然スキャンダルが出て、それが…ちょっと長くなってもいいですか」

水島「AFDのスキャンダルですか」

川口「そうです」

水島「はい」

川口「それを主要メディアが一斉に報じたんですけれど、スキャンダルの中身っていうのは、去年の11月にAFDのメンバーとキリスト教民主同盟のメンバーも入っていたんですけれど、その人達が秘密会議、謀議をして、ドイツに居る難民とか移民を、例えばドイツ国籍を持っていても全部、国外に強制退去させるって言って、何処にするか分からないけど、そういう風に言い出して、それを、ある組織、NPOですけれど、ある組織が、それを暴きましたっていうスキャンダルだったんですね。

それがポツダムのあるホテルのレストランで、それを暴いたNPOの名前がコレクティブっていうんですけど、私、これを前から知っていたんですけど、2017年ぐらいに出てきたNPOで、何が仕事かって言うとSNSなんかで、これはフェイクニュースである」

水島「うん」

川口「これはヘイトニュース、ヘイトであるとかっていう、それを探す、リサーチするのが仕事。それをリサーチして、それで言うと、もう、そのところで勿論、バンされることもあるし、だから直ぐに削除しなきゃいけない。削除しなかったら凄い罰金がかかる。だから、そのNPOにそんな検閲権限があるとは思えないんですけど、でも、それを、きっかけにして、こういうのがあるっていう係。

それを政府が利用すれば、都合の悪いニュースを全部、取っ払える訳ですね。それで、コレクティブっていうのが11月のその秘密謀議を発見しましたと言って、そのホームページにポンっと出したんです」

水島「うん」

川口「そうしたら、もう次の日ぐらいにドイツの主要メディアがテレビも含めて、それを国家転覆を企んだということになって。そうしたら何か突然ねえ、もう、それが昔、ヒトラーの時代にバンゼイっていう湖のほとりでナチの幹部が秘密会議をやって、その所でユダヤ人をマダガスカル島に持って行くっていうことを決めたんですよ」

水島「ああ、送るっていうね。うんうん」

川口「そうしたらバンゼイ会議2.0とかっていう名前をつけて、それで、あと Deportation っていう言葉を使ったんですよ。Deportation っていうのは、まあ、英語も同じですけど元々は移送とかっていう言葉なのかと思うんですけど、だけど、それは、ドイツで使うと、それはイメージとして完璧にユダヤ人を移送してアウシュビッツとかに移送したっていう言葉が Deportation なんですよ」

水島「なるほど」

川口「だからAFDが秘密会議で Deportation をやったということを…」

水島「ああ、なるほど。そっちへ持って行ったんだね」

川口「そうしたら何が起こったかって言ったら、もう国民が民主主義を守らなきゃと言って、もう絶対にあれを繰り返してはいけない～って言って、凄いデモを始めて、それは、もう日本で多分、報道されていると思うんですけど、民主主義を守るため、だから反AFDのデモになって、それが全国で凄かったんです。もう十万とかの単位で」

西村「ちょっとお聞きしたいんですけど、あの時、日本の報道ではドイツの為の選択肢が不法移民でドイツ国籍を取った人の国籍を剥奪するということをやったので、デモが起きたっていう報道のされ方ですよ。それは正しいですか」

川口「いや、それは…」

西村「それは正しくないでしょ」

川口「だって、そこで、そんな謀議が行われたっていう証拠さえ無くて」

西村「うーん」

川口「だって外から中に居る人物とかを窓から撮っているんです。本当の秘密会議なら、そんな外から望遠レンズで中の様子を撮れるようなレストランでしますか」

一同「(苦笑)」

川口「それで、あと何処かに移送するって言ったって、一体、何処に誰が受け入れてくれるんですか。それは全部、おかしい話なのに、だから結局、今、コレクティブは、そのホームページでちょこちょこ修正しているみたいです。そういうのが本当だったら、録音があるとか誰が何を言ったっていう記録ぐらいは出してもいいのに、それも出ないんですよ」

水島「うんうん」

川口「だから、そこに参加していた人達が反論しますよ、勿論、そんな謀議なんか無かったっていうね」

水島「そうだよ」

川口「反論するでしょ。その人達の中にはオーストリアから一人、極右って言われる活動家も来ていたんですよ。何故、来ていたかって言うと、その人が本を出したから、その本の紹介の為に来て、みんなで集まっていて本当にプライベートの会合だったって言うんですよ。その時に、そこで一人、講演でスピーチしたって言う人も、ずっと反論して、今、YouTubeで凄く反論していますけど、その人の講演の内容は郵便投票の不正の問題」

水島「うん」

川口「だから、これから、それがあって、みんなが思っているから、これから今のドイツの選挙でね」

西村「アメリカの真似しようとしている」

川口「だから、僕は、そのことについてのスピーチをしましたって言うから、何か、その謀議があったんじゃない、全然、何の証拠も何も出ていないんですよ。だから、今、それは無いんだけど、でも、そんなことは全然、問題じゃなくて、みんな、もうAFDを潰さなきゃいけないって言って、ずっとデモをしているんです。それをテレビが、もう、全部、トップニュースで長々と、この間、ずっと何日間もやっていましたね。最近、やっていない…」

水島「それは、ちょっと、失礼ですけど、主催は各政党ですか、或いは市民団体を装った人達ですか」

川口「市民団体というか普通の市井のっていうか、普通の草莽の人達が来ているということになって、でもシュルツ首相がポツダム市に来て、やっていたデモに自ら参加しているんですよ」

水島「ああ、じゃあ、もう、そうだ」

川口「だから、そういうのって…」

水島「つくられたね」

川口「普通、首相は参加しないでしょう」

水島「参加しないでしょう」

川口「そう。それとか他の政治家も、それに対して鼓舞するようなことを言って、毎日、トップニュースでやるから、みんなが行かなきゃと思って、それで行くと、やっぱり連帯感みたいなもので高揚しちゃうじゃないですか。

この間、私のドイツの友達と電話して喋っていたら、同じマンションの人がデモから帰ってきた時、もう引くぐらい高揚していたって言っていましたが（笑）」

水島「（笑）いやあ、だから再び全体主義、ナチのようなドイツにしちゃいけないみたいな思いで、単純に思っているんでしょうね」

川口「だから何かね、そう。私、今回のことで凄く思い出したのは、あの難民を入れた時の話ですけど、あの時にオーストリアから電車がミュンヘンに着いた時に、市民が大勢、集まって、それで本当に、ようこそみたいな感じで、子供にぬいぐるみをあげたりとかして高揚していたんですよ。

あれを凄く思い出して、でも、あの高揚は3か月ももたなかったんですよ。だから今回、どうなるかなあと思うんだけど、この間の難民の時は、あまり、もう応援しちゃ拙いって政治が引いたけれど、今回は政治家の応援が続くと思うんですよ。

政治家とメディアとNGO、NPOの応援が。それが、いつまで続けるかって言ったら、そのAFDを潰すまで続けたいんだと思うんですね」

水島「そうすると。例えば、我々がフィルムで思い出すのは、反ユダヤのデモをね、昔、ナチがやっていたのと近い感じ、その一部のとんでもない選択肢の人達っていうか、まあ、構造的に言うと、動員されているっていう感じと、自分達も高揚しているっていうね…」

川口「う～ん、動員されているとは思わないけど」

水島「それとは似ていないですか」

川口「う～ん、鼓舞したりして勿論、動員している方はしているんでしょうけど、動員じゃなくて後ろから押しているみたいな、背中を押しているみたいなところは絶対にあると思いますけれど、押されている方は、それに気が付いていないと思う。だから本当に自分達は民主主義の為にやっていると思っていますよ」

水島「そうそう。いや、そうなんだよ。でも、やっぱり伊藤さん」

伊藤「はい」

水島「今、ドイツの大衆社会の状況と言うか、こういう話を今、して貰ったんだけど、やはり、これは共通するもんですかね、アメリカの今の、所謂…」

伊藤「あのね」

水島「うん…」

伊藤「はい。僕の好きな、例によって例の如くロシアのセルゲイ・カラガノフですね」

水島「はいはい、ええ」

伊藤「彼は意外とドイツと日本に好意的でして、以前も言いましたけれども、ドイツと日本が自主的な核抑止力を持って独立国になるのを、私は歓迎すると」

水島「うん」

伊藤「そういう風に言っている訳ですね」

水島「うん、そうですね」

伊藤「しかし彼が今のドイツと日本の事を何と呼んでいるかって言うと、彼は今の日本とドイツは、アメリカのストラテジック・パラサイトに過ぎない」

モーガン「うん。そりゃそうだ」

伊藤「戦略的な寄生虫に過ぎない」

水島「まあ、そうですねえ…」

モーガン「そうそう（失笑）」

伊藤「ね」

水島「いや、だから、そうですねえ」

伊藤「今の日本人とドイツ人なんていうのは単なる寄生虫であると」

水島「うん」

伊藤「何も考えていないと」

水島「うん」

伊藤「例えば、日本の場合は、周辺国である中国とロシアと北朝鮮が単に水爆弾頭を持っているだけではなくて、ロシアは、もう数千発の戦術核弾頭を持っていますけれども、北朝鮮と中国も去年から必死になって戦術核弾頭を増産し始めたんですね」

水島「そうですね」

伊藤「何故かと言うと、1年半前からロシア政府、プーチンとかメドベージェフとかカラガノフを含めてロシア政府の要人達が、もしNATOの通常戦力が出て来るならば、我々は戦術核弾頭を使うと」

水島「うん」

伊藤「戦略ではなくて戦術ですね。小型の核弾頭」

水島「はい、そうですね」

伊藤「それを言うと、もうアメリカは止まっちゃうんです」

水島「うん」

伊藤「要するに、それを言われると、NATOの通常勢力が、どれ程、強力でも、ロシアが数発、もしくは数十発の戦術核を使うぞと言うと、アメリカは、そこで、もうストップしちゃうんです」

水島「うん」

伊藤「もう手が出ないんです」

水島「うん」

伊藤「中国と北朝鮮は、それを見て戦術核弾頭っていうのは、こんなに効果があるのかと」

水島「うん」

伊藤「今迄、中国と北朝鮮は戦略核弾頭を持てば充分だと思っていたんですね」

水島「うん」

伊藤「ところがロシアがタクティカル・ニュークリア・ウェポン、戦術核弾頭を使うぞという脅しをかけたら、あの巨大なNATOが動けなくなっちゃった」

水島「うん」

伊藤「これは何を意味するかって言うと、北朝鮮と中国も数百発なり数千発の戦術核弾頭を持てば、アメリカは、もう動けないんですよ」

水島「その通りですね」

伊藤「だから北朝鮮も中国も一生懸命、戦術核弾頭を造り出した訳ですね。因みに戦術核弾頭っていうのは、戦略核弾頭よりも造るのがよっぽど簡単です」

水島「うん」

伊藤「ですから造ろうと思えば中国も北朝鮮も何百発だって何千発だって造れる訳です」

水島「うん」

伊藤「それをすれば、もうアメリカは日本を助ける為に出て来ないと。こういうことになる訳ですね」

水島「そうですね」

伊藤「しかも素晴らしいことに、アメリカ政府はそれが解っていても、日本の周辺国である中国、ロシア、北朝鮮が戦術核弾頭を何百発、何千発、持とうとも日本人だけには核を持たせない」と

水島「うん」

伊藤「もう素晴らしいんですよ」

水島「(苦笑)」

伊藤「既に二度も核攻撃、核戦争犯罪の犠牲になった日本人にだけは絶対に持たせない」

水島「うん」

モーガン「そうです」

伊藤「アメリカは凄いんですよ」

水島「うん」

伊藤「それで日本人は黙っているんですね」

水島「うん」

伊藤「何も言わないんですよ。そういう仕打ちをされても抗議しないんです。凄いんですよね」

水島「うん。そうですね」

伊藤「もう寄生虫だから」

西村「うん、本当にパラサイトだね」

伊藤「抗議しないんです」

水島「うん」

伊藤「それで1年半ぐらい前に、あれは、もう殆ど確実にアメリカがやったことですからけれども、ノードストリーム2っていうドイツとロシアを繋ぐ海底のパイプを爆破されて、ドイツ人は3倍か4倍の値段のする高いガスを輸入せざるを得なくなったんですね」

水島「うん」

伊藤「ドイツ人の特に政府の幹部は、あれをやったのはアメリカだって知っているんですよ」

水島「うん」

伊藤「だけど何も言わないんですよ。寄生虫だから」

水島「うん」

伊藤「寄生虫は何も言わないんですよ」

水島「うん」

伊藤「それで結局、何も考えていないんですよ」

水島「うん、うん」

伊藤「特に日本の場合は、日本が存在できるか否かという非常に危機的な状況に立たされているんですけども…」

水島「そうですねえ」

伊藤「アメリカが、北朝鮮と中国が戦術核弾頭をどんどん増産していると」

水島「うんうん」

伊藤「それでも日本人にだけは絶対、持たせないということに関して、日本は沈黙し続けているんですね」

モーガン「そういうこと」

伊藤「単に左翼が沈黙しているだけじゃなくて、保守派が沈黙しているんですね」

水島「そうなんですよ」

伊藤「所謂、親米保守と、もしくはアメリカに崇拝して、くっついていりゃあ大丈夫だという連中ですから拝米保守」

水島「はい」

伊藤「ね、拝米保守。親米保守達も沈黙しているんですね。日本人にだけは持たせないと命令されても、それは、おかしいと言えないんですよ。これ、凄いんです。それで、結局ねえ、人間にとって一番大切なのは、Moral Autonomy、道徳的な自治権と」

水島「うん」

モーガン「そうなんですよ」

伊藤「自分達の道徳的な判断は自分達がやるという Moral Autonomy が、人間にとって一番、大切な訳です」

水島「うん」

伊藤「それで Moral Autonomy を持つ為には、やはり Political Autonomy、政治的な自治が必要です」

水島「うん」

伊藤「今の日本っていうのは、ドイツもそうですけれど、自分達の Political Autonomy と Moral Autonomy を回復しようという意欲が全く無いんですね」

水島「うん」

伊藤「これねえ、今のドイツ人も日本人も人間じゃなくて寄生虫だから、Moral Autonomy と Political Autonomy を剥奪されていても何も感じないんですよ」

水島「うん」

モーガン「そうですね」

伊藤「それでねえ、ここまで来ると demoralization と。要するに Morale、士気ですね、士気。モラルっていうのは戦う意志とか独立の意志とかいうことですけれども、Morale、士気を完全に無くした状態で demoralization ですけれども、今のドイツ人と日本人っていうのは本当に完全に demoralize されて、もう79年経っているのに、もう一度、独立しようという意欲すら無いと」

水島「うん」

伊藤「だから、川口さんのおっしゃったことを聞いていると、ドイツ人も日本人も単なる寄生虫になったなあという風に思いますし、恐ろしいのは、ドイツ人も日本人も自分達が単なる寄生虫に過ぎないと、そういう自己認識すら無いことですね。これが一番、怖いですね」

水島「そうですねえ、その…」

西村「あ、いいですか」

水島「はい、どうぞ」

西村「伊藤さん、どうも、ご無沙汰しています、どうも。今、伊藤さんがおっしゃった通りですが、唯一、その寄生虫から脱しようとした人が、日本に二人居た訳ですね。その一人が中川昭一さんだったんですが、そして二人目が安倍晋三さんであって、丁度、暗殺される二か月前の5月6日にBSフジの討論番組に出た時に、アメリカの拡大抑止というものが、つまり核の傘は不確かなものだから、それを確かなものにする手続き、確認を取らなければいけないって言うところまで言ったんですね。

それは、どういうことを意味しているかと言うと、要するに、核シェアか日本の核保有か、どっちかだっていることですよ。それを言っている訳ですよ。

岸田首相に対してのメッセージだった訳ですが、しかし二か月後に暗殺されて、それで今、こういう状況になっているって言うことですね。中川さんに関して言えば、田村秀男さんが一回、スクープしているんですが、彼が政調会長の時代、2006年12月、平成18年の12月25日の産経新聞の一面、トップ記事で『核弾頭試作に3年以上かかる』という政府文書を作らせているんですよ。それで費用は2千億から3千億円で造れる。

中川昭一さんは、これを通産省、経産省の官僚に作らせたんですよ。これを田村秀男さんがスクープしたんです。ところが、このスクープされる前の段階でコンドリーザ・ライス (Condoleezza Rice) が直ぐ日本に飛んで来て、それで、核の議論を止めろと言いに来た訳ですよ。これは第一次安倍政権の時ですよ。まあ、そういう経緯があったって言うことを、やはり我々は、きちっとしておく必要があると思うんですね。それで二人とも、最早、この世に居ないってことなんです。

伊藤「あのね、ちょっと反論しますけれども」

西村「はい」

伊藤「安倍さんは首相をやっている時は、トランプに何度も自主防衛しろ、自主防衛しろと、十数回、言われているんですよ」

西村「はい」

伊藤「トランプは、核を持ってもいいから自主防衛をしろと言った訳ですね。僕の知っている限り、彼は一度も、その話に乗らなかったんですよ。全部、話をずらして別の話題に替えちゃった訳ですよ」

西村「ああ、解りました」

伊藤「それでね、岸の弟である佐藤栄作も…」

西村「同じですね」

伊藤「2年半に渡って、ニクソンから日本は核を持って自主防衛しろ、独立国になれと言われたけど…」

西村「ああ、沖縄返還の時ですね」

伊藤「佐藤栄作も徹底的に逃げた訳です」

西村「はい。その通りです」

伊藤「何故かと言うと、岸も佐藤もCIAから、たっぶり工作資金を貰って…」

モーガン「そうです」

伊藤「その貰った工作資金をばら撒いて、自民党の総裁選に勝った連中でしょ」

モーガン「そうです」

伊藤「だから岸も佐藤もCIAの手先ですよ」

水島「うん」

伊藤「安倍がイエスって言わなかったのは、僕は佐藤の振る舞いと凄く似ていると思うんですね。それで終わったあとでニュークリア・シェアリングした方がいいとかね、そんなの誰だって言える訳」

水島「うん」

伊藤「もう一つ、中川と安倍に関するエピソードを言いますけれども、僕は、中川と仲が良かったです」

西村「はい」

伊藤「二人だけで酒を飲んで、勿論、核の問題も話し合っただし、国際政治学の話もやったし、ご存じのように中川は、日本が核を持つべきでないかと議論をすべきだと言った時、その数か月後に僕が中川と会って二人で酒を飲んでいたら、中川は自民党の議員は全員、逃げたと」

水島「うん」

伊藤「あいつらは全員、逃げたと」

水島「うん」

伊藤「ただの一人も、俺も一緒に言うからと言って中川をサポートしなかった」

水島「うん」

伊藤「安倍も逃げたと」

水島「うん」

伊藤「それで、ただ一人、中川に対して同情的だったのが、実は麻生さんだっただけ言うのね。麻生さんが中川の傍に寄って来て『おい、昭一、おめえ、間違っただけ』と（笑）」

一同「（笑）」

伊藤「そう言って励ましたっていう話ですね」

西村「はい、はい」

伊藤「だから安倍は逃げた訳ですよ。トランプに核を持っていいから自主防衛しろって十数回も言われて、安倍はイエスって言いましたか」

水島「う〜ん」

西村「言っていないですよ」

伊藤「あのねえ、だから、あの二人は、ちょっと違う」

西村「うん」

伊藤「とにかく岸も佐藤も安倍も結局、C I Aから、たっぷり工作資金を貰って、日本の政界で上に昇った家系ですから、勿論、C I Aにしても国務省にしても、日本の周囲の国が全て核武装をしても日本人にだけは絶対に持たせないと。こういう対日政策でしょう」

水島「うん」

伊藤「安倍がそれに逆らえますか。彼は岸と佐藤が、どれ程、C I Aのお世話になったか知っているでしょ」

水島「うん」

伊藤「だからね、日本が79年間の戦後レジームから抜け出せなかった原因の大きな一つは、岸と佐藤がC I Aのエージェントになっていたと」

水島「うん」

伊藤「これは凄く重要だったことがあるし、僕は安倍と中川では、相当違うという風に思います。判断力、行動力、意志力が、相当違ったと」

水島「うん」

伊藤「僕は、中川の方がずっと正直だったという風に考えています」

西村「解りました」

水島「はい、今の話は、大変、驚いている人も居るかも知りませんが、その流れは、全然、変わっていないっていうね。そして益々日本の支配というか、やっぱり植民地化というか、こういうものが進んでいることは、もう間違いない訳ですね」

川口「ちょっと付け足していいですか」

水島「はい、どうぞ」

川口「ちょっとだけ今の伊藤さんのお話に関して付け足したいんですけど、日本とドイツがアメリカの寄生虫になってしまっているっていうのは、今の状態を見たら本当に残念だけれど、そうだなあって思うんですね」

水島「うん」

川口「だけれど、私はメルケル首相の事は社会主義者だったのに、何か保守のフリをして色々なことをやっていたということを、自分でも随分、書いているし、そういう意味では、保守の政治家としては全然、評価していなかったんですけど、今、考えたら、彼女が居た間っていうのは、アメリカに牛耳られないようにロシアカードをしっかりと握っていたと思うんですね」

水島「うん。それ、使っていましたね」

川口「うん。だからアメリカもそこまで手を出せなかったっていうところがあって、それがアメリカにとってみたら、もう嫌で嫌でしょうがなかったと思うんですね」

水島「うん」

川口「ロシアとドイツが、もっと仲良くなって組んだら、もう危ないことになると思っていたと思うんですよ。それでメルケル首相が16年間で辞めたあとに残してくれた政権っていうのが社会主義政権になったっていうのは、これは、もうメルケル首相の功績だと、私は皮肉な意味で思っているんですけど、そのあと直ぐに本当に、それが、もう21年の12月ですから、じゃあ、22年に直ぐに戦争が始まった訳じゃないですか」

水島「うん」

川口「その時にドイツはロシアを経済制裁するとか、ロシアに本当に敵対するような事態に追い込まれたと思うんですね」

水島「うん」

川口「これは、もうアメリカが、これでドイツとロシアを切り離せたと言うから、これは、メルケル首相が居たら、やっぱり、ここまでいっていなかったと思うんですね」

水島「そう、そこが、今言った岸、佐藤系のものと、メルケルというドイツの共産党員だった強かな人との政治家として資質の違いとかね」

川口「そうですね」

水島「資質もあると思うんでね」

川口「うん」

水島「実は、この問題ですよ。一番、極めて大事な問題っていうのは今、お話になったね、我々の国が元々吉田さんから始まって、この79年、80年、こういう状態がずっと続いて来て、益々今言った寄生虫化しているということを、一体、これを打破出来るか出来ないかっていうのはね、実際、今の状態を見れば絶望的な気持ちになりますけども、それでも諦めないっていう状態…」

西村「まあ、虫下しのようなものを見つけないと」

水島「そう。と言うことで…」

及川「ああ、ちょっとドイツのところだけ、ちょっとだけ、いいですか」

水島「ああ、じゃあ、一回、休みに入るので、冒頭をお願いします」

及川「はい。分かりました」

水島「一回、お休みになります」

一同「(礼)」

<後半>

水島「はい。後半に入りました。先程、伊藤さんの話を継いで川口さんから、こういうものが出ました。及川さんから、何かあるということなのでお願いします」

及川「はい。伊藤先生のカラガノフの話から始まったと思うんですけど、伊藤先生、セルゲイ・カラガノフはロシアの大学院の先生で…」

伊藤「はい」

及川「HSEっていう大学院大学がモスクワにあるんですよ」

伊藤「はい」

及川「ね。そこの政治学部のトップを務めている方ですが、実は、昨年11月にその大学の国際政治のシンポジウムがあって、そこでカラガノフが基調講演をするということで、私、そこに行ったんですよ」

一同「うんうん」

伊藤「はい」

及川「それを見たくて、カラガノフに是非会ってみたくて行ったんですけど、残念ながら体調が悪くて駄目だったんですよ」

伊藤「ああ、それは、もったいなかったね」

及川「凄く残念だったんですよ」

伊藤「ええ」

及川「でも、その大学の他の政治学の先生方とも色々話せたんですけど、やっぱりカラガノフが発信している核についての話っていうのは物凄い反響ですね」

伊藤「ええ」

及川「それで、やっぱり賛否両論」

水島「うん」

及川「賛否両論で、去年の6月だったかな、カラガノフがこの大学から出したメッセージで『難しいけど必要な決断』っていう Difficult but Necessary Decision っていう核兵器について、要するに核の本当の怖さを今のリーダー達は解っていないと」

水島「うん」

及川「だから核の意味がなくなっていると」

水島「うん」

及川「だから、そんなリーダー達が各国のトップになっていて核を弄ぶようになると本当に怖いと。だったら、もう難しいけど必要な決断ということで、核の怖さっていうのを、一度、この今の各国のリーダー達に教えなきゃいけないという、まあ、そういう議論をしていてね、その中で確かに今の特に西側の日本とかドイツ、西側のリーダー達っていうのは質が非常に低いと」

水島「うん」

及川「ローカル・エリートっていう言い方をしていましたけど、そのローカルなエリート達の質が凄く低いっていうことで、確かに先程、伊藤先生が使われた言葉の Parasite、寄生虫っていうのは全くそ

の通りだと思うんですけど、そんな中で川口さんが今、ドイツのメルケルの話をされたんですけど、私が思い出すのは、今回のウクライナ戦争の本当の危機は何処にあったのかと」

水島「うん」

及川「確かにウクライナっていう国は今ボロボロになっていて、ウクライナの人達は本当に可哀想。しかし、ウクライナ戦争の本当の危機は、ドイツの危機じゃないかっていう話があって、地政学者で未来学者のジョージ・フリードマンっていう人が居るんですよ。そんなに知名度が高い人ではないと思うんですけど。ジョージ・フリードマンっていう人が言っているのが『第一次世界大戦、第二次世界大戦、そして冷戦と何世紀にもわたって戦争を繰り返してきた米国の根源的な関心はドイツとロシアの関係である』と」

水島「うん」

及川「『何故ならドイツとロシアが一体となれば、我々アメリカを脅かす唯一の勢力となるからだ。アメリカは、それを止める為に戦争をしてきた』というような言い方をされていて、結局、アメリカにとっての脅威って何なのか。それは、はっきり言って、ロシアの資源とドイツの技術」

水島「うん」

及川「これが結びついて一つのパワーになってしまうこと。もう、こうなった時にアメリカにとっての最大の脅威となる。ここでパワー・バランスが完全に崩れる。もしかしたら、そのドイツの部分と日本に置き換えても一緒なのかもしれない」

水島「うん」

及川「だから、ドイツと日本を寄生虫のままにしている勢力っていうのも、アメリカの中にあるんだろうと思うんですね」

水島「勿論、そうですね」

及川「私はね、このこと自体、このグローバリズムっていうものと抗していくっていうか戦っていく一つのヒントだと思うんですよ」

水島「うん」

及川「確かに現状は、もう寄生している。すがっていると。今日の議論の最初に司会をされている水島社長が、グローバリズムっていうのは色んな意味があって、人間の心の問題もあると」

水島「うん」

及川「正に、その心っていう意味で言うと、大きなものにすがっていく、大きなものに依存する。これは正に、さっき、ちょっと出した『1984』。全体主義国家が人々に求めているものですよ」

水島「うん」

及川「とにかく依存しなさいと。依存してくれれば全部、やってあげるよっていう。で、具体的にはヨーロッパの北部とかの福祉国家っていうのは正にそれです」

モーガン「はい」

及川「その代わり考えるなど。そして依存せよと。この依存するっていう心。私は、メルケルさんというのは大変なクリスチャンでいらっしやって…」

川口「(失笑)」

及川「そこは違うのかな、分かんないけど、私は元々キリスト教だったものですから、キリスト教の世界の中では、メルケルって凄く尊敬されているんですよ。クリスチャンで信仰心っていうのを出しなが

ら、政治家としてやられてきたからです。その中で、さっき言われた通り、メルケルの時代っていうのはノルドストリームを造っていた時代ですからね。正にノルドストリームという、ロシアとドイツを結んできたものを一緒に造って来た。この時もアメリカの物凄い反発があって、物凄いアメリカの邪魔があったにも拘らず、押し通しましたよね。

例えば、日本が今、ロシアのシベリアの天然ガスを樺太から引いて来て、パイプラインを造るって、これをやろうなんていうことは誰も出来ないと思うんですよ。でも、それと同じことをメルケルさんは確かにやってしまった」

川口「最初は、まあ、シュレーダーですけどね」

及川「シュレーダーですね」

川口「うん」

及川「完成した時はメルケルだったっていう」

川口「2本目は完璧にメルケル」

及川「そう、2の方はね」

川口「(頷く)」

及川「そういう何か独立するっていうか、Be Independent っていうのかな、このグローバリズムと戦う心の持ち方ではないかなと。私は政治思想的にとか経済体制的なところとか、色んな観点はあると思うんですけど、最終的には人間の心が変わらない限り、このグローバリズムっていう現代の悪魔には勝てないような気がしますよ」

川口「でも、そこで私が問題だと思うのは今、おっしゃる通りで、私もその通り、ずっと思っているんですけど、アメリカの意向っていうのは、なるべくドイツとロシアを切り離すと。それが今、成功している訳ですよ。でもドイツ人の普通の国民は、色んな影響を受けて自分達で考えていると思っているんでしょうけれど、ドイツの国民は、もうロシアのプーチンっていうのは凄く悪い奴で、あそこは制裁して弱めてウクライナを勝たせなければいけないっていう風に思っている人が、未だ半分は絶対に居ると思うんですよ。

そういう風に思われていると言い切っていいかどうか分かりませんが、国民がそう思っている限りは、やっぱり未だアメリカの意向に寄生虫状態で、これから、更に寄生虫化していくのかなあという風に、ちょっと悲観的に考えています」

水島「今、及川さんも言ってくれた心の問題で言うとね、ヨーロッパで一番、問題だったのは19世紀、20世紀の、神様っていうのは本当にキリスト教の神ですけどね、『神は死んだ』という感覚で、それを引き受けなきゃいけないっていう時代になったけども、本当に、それに代わる生き方がヨーロッパの中で誰も見つけることが出来なかったっていう。それで、今、言ったように、日本もそうだし、ドイツもそうで、共通なところは、自分達、人間の存在っていうのを超えた何かがあるんだというね。それを自分一人では、とてもじゃないけど扱えない大きなものと言うか、どういう名称でもいいけども、何か超えたものがあるって、自然とか、そういうものに対して畏敬の念とか、こういうものが無くなっている。

今、よく言われるようにシステムと法律を、ちゃんと整えれば、みんな、幸せになれるみたいなね。従って、さっき言った、言うことを聞かせるという状態になっていくっていうね。奴隷状態ですけど、はっきり言うと、こういうことの中で、やっぱり、その問題が抜け落ちている。私達が今、岸田さんを見て思うのはね、こいつ、何て薄っぺらな奴なんだろうっていうね。それでも自然な素朴の気持ちで日本の国民を幸せにしたいとかね、頭は僕は馬鹿だけどね、幸せにしたいんだっていう思いとか魂みたいなのが感じられれば、う～ん、まあ、馬鹿だけど一生懸命やっているからなというがあるけれど、それが一切、出ない。面の皮だけで頭が出来ているような感じのね」

及川「うん」

水島「そういう感じの人になっちゃっている。これは、やはり、さっき言ったグローバリズムの正体っていうのは、さっき言ったように支配する人達がコントロールするっていうか、言うことを聞いている子にはニコニコさせてって、だから岸田君、君は凄い優等生だから今度、4月にアメリカに国賓として招待してあげるって。嬉しいなあって、こうなる訳でね」

一同「(笑)」

水島「この感覚が、やっぱりハッキリ言うとグローバリズムというものの中で、今、どんどん反抗するって大変ですよ。喧嘩するのも大変だし、怒るのも大変ですよ。エネルギーが物凄く要るから。だけど、こういう風に言うことを聞いている人達には一見、心地よいサファリパーク内の動物のように、肉を与えられて自由だと思いながら生活している動物達、まあ、寄生虫っていうのは、もっとキツイと思うけど(笑)、こういうことが起こっていて、ただ、もう一つ、もし、こういう絶望的な状況の中で、今、お金を持っている、権力も持っている、軍隊を持っている、ね、そういう人達に対してやれるというのは、最後は『心』というか、草莽崛起が出来るとしたら、それは伝統とか元々日本人が根本に持っていたものからしか変えられないんじゃないかっていう気はしているんですけど、どうぞ」

モーガン「あ、すみません。先程、前半、社長がされたご質問に対する答になるかどうか分からないんですけども、このグローバリズムの精神的な源とは何かっていう非常に重要なご質問だと思ひまして、ウラジーミル・ブコフスキー (Vladimir Bukovsky) という人が、今、もう死んでいるんですけども、ロシア、ソ連の中では、このスターリン主義とか、この社会主義とはけしからんと言っただけで精神病院、精神刑務所に入れられて、何十年間も。結局、ソ連から逃げて、西洋に来る訳ですけども、あなた方は今でもソ連とは komunizm とは何かと解っていないと言って。同じことを言ったのはアレクサンドル・イサーエヴィチ・ソルジェニーツィンという人もアメリカに来て、お前達がソ連に対して勝ったと自慢しているんですけども、貴方達も精神的に非常に貧困な状態に陥っているって」

同じようなことで、日本国内では、アメリカとはどういう国、西洋とはどういう所なのかと解っていない人が殆どな気が致します。先程、申し訳ございませんが、及川先生に対して、ちょっと反論させて戴ければ…」

及川「(頷く)」

モーガン「メルケルは決してクリスチャンではないと思います。有名なシーンがあります。ダウン症の女性の方がトークショーの中でメルケルに対して、赤ん坊、未だお腹の中に居る時、ダウン症だと判って中絶を禁止しませんかっていう風に聞いて、メルケルは、それは出来ませんとか、ダウン症の方に対して、つまり貴方のような障害者を生まれる前に暗殺してもいいよというようなポジション、でも、勿論、非常に柔らかい言葉を使って言ったんですけども、それは何故、重要かって言うか、これが、私の一番、言いたいポイントです。

エリートという言葉がよく出るんですが、アメリカではエリートは居ないですよ。みんな、寄生虫です。あのワシントンが国民の寄生虫。私が先程言ったグレンコ、ウクライナ人は、みんな、寄生虫ですかと聞いた人ですね。それは三流寄生虫ですね。トップの寄生虫が一番大きな幼虫はワシントンです。あの蠢いている気持ち悪い奴ら。その下には自民党があるんです。その自民党はCIAが傀儡しているのは、もう明らかで、今もそうですし、自民党は日本人の党ではなくて、ディープステイトの代わりに、この国の中でワシントンが、いつも発信している奴隷メンタリティを、この国の中で担当する為にもある。

それに反対する人が現れたら暗殺される。それは明らかにそうなっています。アメリカはどのようなところかと、私の方からアメリカ人として言わせて戴きたい。アメリカ人は別ですけども、我々の政府はサイコパスです。死のカルトです。死のカルト。アメリカの中で、大体、二流がございます。

北部と南部。北部の奴らはピューリタンです。途中から自分達はもうクリスチャンだと思わないようになったんですけども、それで途中からジャーマン・イデアリズム（ドイツ観念論）が盛んになって、その代表的な人物としてはエイブラハム・リンカーンが居ます」

水島「う～ん」

モーガン「1863年7月にゲティスバーグ・アドレス、ゲティスバーグってペンシルベニアの大きな戦場で戦いがありまして、リー将軍は北部の敵に戦いを持って行きましようと思って、こっち側が負けた。そこに現れて短い演説をしたのはリンカーンの有名なゲティスバーグ・アドレス。

そのゲティスバーグ・アドレスは、よく読むとアメリカについて語っているのではない。これは概念的なイギリス的な国、つまり自分の頭の中で想像したピューリタンの次の番ですね」

水島「うん」

モーガン「ピューリタンっていうのは、この本から抽象したクリスチャンのような雰囲気、でも本当に、あの連中がアメリカ大陸に来て、私達はニュー・イスラエルと信じ切って、私達は丘の上の輝いている町を創らなければならないと聖書の中に書いてあるので、しかし現地人は居るじゃないですか。現地人を大虐殺して、もう平気で、北部らしいSlave Holding Mentalityで、南部では貴族ですね。『風と共に去りぬ』をご覧になったことがあれば解ると思うんですがスカーレット・オハラとかも貴族ですね。アメリカ版貴族です。

皇族です。その二つも、現地人とか黒人に対して両側が見下しているんですよ。南部の皇族的な、貴族的な非白人を見下している理由、一つの理由が消えちゃった訳です。今は、ピューリタンの国です。日本に来て初めてアメリカはクリスチャンの国ですと言われたんですよ。ええ～っ、知らなかった」

一同「(笑)」

モーガン「アメリカはクリスチャンの国、全然、そうではないですよ」

水島「なるほど(笑)」

モーガン「非常に残酷な国で、そのワシントンは、今の考えでは、我々全国民が奴隷です。全国民が家畜に過ぎないです。日本人も奴隷です」

水島「うん」

モーガン「ドイツ人も奴隷です。みんな、奴隷です。その反発の出来る国としてはドイツ、ロシア、それから日本です。先程、及川先生がおっしゃった通り、ロシアは資源ですね。ドイツは技術、日本は精神パワーがあります。日本は文明のパワーがございます」

水島「うん」

モーガン「NATOっていう役割はドイツを閉じ込める。だから、それはあると思います。NATOは全くロシアとは関係ない。ロシアっていう昔のワシントンのグローバリスト・パートナーだったことを反省して、今、その気の狂ったワシントンに対して戦争しようとしている。つまり自分の国を守ろうとしているんですよ。あのプーチンはヒーローですよ。あのプーチンは」

水島「うんうん」

モーガン「もう世界のヒーローですよ。あのワシントンは、もう気が狂っているんで、我々の国民を守りたいと思って防衛しているんですけども、ロシアは昔、ワシントンっていう気持ち悪い連中と協力したことを反省していて、今、立ち直って、もう…」

水島「それは、ソ連の事を言っているんですか」

モーガン「生まれ変わったです。はい」

水島「うん」

モーガン「生まれ変わったです。ソルジェニーツィンのな国になったと思いますよ」

水島「うん」

モーガン「日本は日米同盟という太平洋版NATOは、日本という恐ろしい国を永遠迄、閉じ込める為にある訳です」

一同「うん」

モーガン「それはワシントンです。そのワシントンの協力者として、伊藤先生が、いつも、おっしゃっているように、私がお言葉をお借りしますが、VCジャポンです。それは他の国の為にある体制です」

水島「うん」

モーガン「それを担当しているのが自民党です。青山繁晴は自民党の中の保守系」

水島「(笑)」

モーガン「それは矛盾ですよ。矛盾です。自民党の中の保守系は、まず居ないですよ」

水島「うん」

モーガン「ナチス党の中でユダヤの好きな人は、まず居ないですよ」

一同「うん」

モーガン「自民党の中の日本の国民のことを考えている人は皆無です。居ないです。みんな寄生虫の二流で、最も大きな寄生虫に仕えることが自分の使命だ。自分のポジションが、そうやって確保されている訳ですよ」

水島「うん」

モーガン「寄生虫同士です。みんな、寄生虫です。エリートなんか居ないですよ」

水島「うん」

モーガン「みんな、サイコパスです」

水島「(笑)」

モーガン「ワシントンは死のカルトですよ。例えば、最近のニュースで私が見て心が痛んだんですけれども、黒人3人がシリアかヨルダンか判らないんですけれども、アメリカの…」

水島「あの国境の所でね、はい」

モーガン「基地でね、ドローンの攻撃で亡くなって、バイデンが、その方々の棺が帰国することを見に行って、前は、自分の腕時計を見て…」

西村「あれ、変わったんですよね」

モーガン「ね、ね。3人がアフガニスタンからね」

西村「何か、あれだけ変わったのかっていうのはね、まあ、演技っていうかね…」

モーガン「まあ、演技です。演技です」

西村「前は、あれだけ批判されたからね」

モーガン「そうです。でも本人は、これは面倒臭いなあと思うんです。つまり、私の国民が、そうやって遠い国で死んでも、それは奴隷が死んだかのように、だから演技をしなければならいんですけども、でも、腕時計を見て、これは本当は面倒臭いなあと思うんですよ。人が死んでも構わない。ウクライナ人、アメリカ人、日本人、ドイツ人は、いくら死んでも構わない。もっと死んで欲しい。死のカルトです。これ、悪魔の連中です。それに仕えているのが自民党です」

水島「うん」

モーガン「その自民党の中から、いいことが来ると期待している人は、ごめんなさい、来ないですよ。みんな、自分の国民を奴隷化した上で自分がポジションを得る訳ですよ。

最後です。クリスタとトッド・コルスタッド、モンタナ州の二人です。自分の娘さんが精神問題を抱えていて13歳か14歳ぐらいで、学校の中では色々な虐め問題があったらしいので、自分がカウンセラーと話したようですけれども、その流れで、『私、男になれば、虐めに遭わない』っていう発言をしたようで、カウンセラーが、それを聞いて、あんなるほどトランスジェンダーだって思った訳です。

もっとトランスジェンダーを推して、推して、推して、結果として、ご両親は親権を失ったんですよ。誘拐されたんです。国家が来て強制連行されたんですよ」

水島「はい」

モーガン「それ、強制連行。自民党の中で、ごめんなさい、有村治子とか慰安婦問題で、もう解決済みとか、慰安婦問題で日本が名誉を取り戻したと言うんですけれども、これから日本国内では強制連行があるんですよ。日本の子供…」

水島「あれは、今でも続いています」

モーガン「今でもそうですよ」

水島「はい。はい」

モーガン「そうさせたのは自民党です。自民党の中から私達は国民を守っているという人はサイコパスですね。本当の事を言えない。本当の事を区別出来ないサイコパスが、この国の中でワシントンというトップのサイコパスの代わりに統治をしている訳です。それは本当です。それは今のリアルです」

水島「うん」

モーガン「もし、この国を取り戻したいと思ったら、どうすればいいかは、それは日本人にお任せしますけれども、アメリカ人として言えるのは、私の国を支配している人々は、みんな、クレイジーです。早く追い出して載きたいです。以上です」

水島「そうですね」

西村「はい。今のモーガンさんの話を聞いていて非常に納得出来るんだけど、別の言葉で言うとね、要するに幕府ですよ」

モーガン「はい」

西村「幕府がワシントンにあるんです」

モーガン「そうです。幕府はワシントンです」

西村「要するにね、今は江戸幕府の時代の後に明治維新が起きて東京が首都になった訳ですけど、大東亜戦争の敗戦後、幕府はワシントンです」

モーガン「そう。まあ、全世界の幕府が。はい」

西村「だから特に日本は、もう完全に」

モーガン「はい」

西村「それは、要するに皇室から、そうなっちゃっている訳で」

モーガン「はい」

西村「だから、そういう意味で言えば、やはり今、日本に一番必要なのは大政奉還です」

モーガン「そうです。そうです。日本の文化は人の心の中では未だ生きていますよ。文化は死なない。永遠に死なない。そこから来ると思います」

西村「はい。それはねえ、余談になるかもしれないけど、例えばゴジラ-1.0が、アメリカで物凄い人気を呼んでいるっていうのはね、恐らく観ているアメリカ人が自分達の悲惨な状況っていうのと重ね合わせたんだと思うんですよ」

モーガン「はい、解るんですよ。みんな、解りますよ」

西村「それでねえ、あれだけ共感を呼んでいるんだと思いますよ」

モーガン「はい。はい」

西村「敗戦直後の日本の状況ですよ」

モーガン「はい。最近、この本を読んでいるんですけども、山本武利っていう方が書いた『検閲官』という本です」

西村「ああ、はいはい、はい」

モーガン「これは戦後、間もなく日本人が、こうやって日本国民の郵便物とか、電信とか電報とかを検閲しているんですよ。延べで1万人以上がそうやっていて、そのあと、ほぼ、誰も、そういうことについて、その経験について語らないという風に…」

西村「でも、僕は2~3人にインタビューをしたことがありますよ」

モーガン「そうですか」

西村「女性で検閲官やっていた方でね」

モーガン「はい」

西村「もう亡くなりましたけど」

モーガン「そうやって転んで、まあ、敵の為に仕えるっていうことが…」

水島「それはねえ、東大の教授を始めとして7000冊ぐらいあるんだけど…」

西村「焚書もそうですね」

水島「焚書が2千数百冊、あるんですよ。今、私の部屋にありますけどね」

モーガン「はい」

水島「これをやった検閲官っていうのは結構、有名なサルトル学者とかであって、これが今、東大の閥から私立大学まで全部、その流れになっているから…」

モーガン「そうです。変わらないですね」

水島「例えば大東文化大学とかね」

モーガン「はい」

水島「国士舘大学とか亜細亜大学とか、所謂、右翼大学みたいに言われていたところが今、全部、左傾、まあ、リベラル化した大学になっているっていうね」

モーガン「そうですね」

水島「こういうことを見ても徹底的に今、軍事、政治、経済だけじゃなくて文化の面でも、こういうところが日本の中で進んでいるっていうね」

モーガン「はい」

水島「徹底化している。だから、この間、これは断定できないけども、例えば、松本人志さんとか吉本興業とかね、こういうものを見ても、そういう芸能の分野まで、一応…」

モーガン「そうなんですよ」

水島「脅かしてね」

モーガン「はい、はい」

水島「言うことを聞かせる。特に吉本興業っていうのは、あれですからねえ、安倍内閣の時だったかな、驚くことにクールジャパン構想で100億円も吉本興業に出しているんですよ。何をやっているんだ、お前っていうね。こういうことも含めて…」

西村「あれは経産省が絡んだんですよねえ」

水島「うん、経産省ですけどね。つまり、こういうような、もう一回、日本の中での芸能やエンターテインメントの世界までも徹底して、洗脳工作が出来るような状態へ作っていく」

モーガン「はい」

水島「メディアも勿論、既に全部、やられていますけど、だから、そういうことが今、起きているっていうこともね、今、おっしゃっているようにね」

モーガン「これ、おかしな話かもしれないですけども、ダンスが流行っているじゃないですか、特に韓国のダンスとか」

水島「うん」

モーガン「私は、そのようなダンスを見ると、これは人間がやるダンスじゃないですね」

一同「(笑)」

モーガン「つまり、要は日本という世界で最も優れている文化を持っている国が、その様な国に住んでいる人々は、半分蛇のようなダンスをする必要が無いんですよ」

水島「なるほど(笑)」

モーガン「全く優雅ではなくて、つまりアメリカでもそうだったし、だってアメリカでは麻薬が流行ったのはCIAがやったんですよ」

水島「うん」

モーガン「CIAが麻薬をばら撒いて、つまりアメリカ人の道徳観を壊す為に、伊藤先生も先程おっしゃっているんですけども、アメリカの道徳観を壊す為に政府は動いている訳ですよ。それは民主主義って言うんですよ。民主主義の前提としては、みんな、馬鹿。みんな馬鹿で、みんな道徳観の無い、この国まで行って空襲をしたいと言ったら解りました。それはアメリカの為だと言ってくれる」

水島「うん」

モーガン「それは民主主義ですね。もうアメリカ人は、それから覚醒しているんですけれども、日本国内でも日本人の優れている道徳観、世界ナンバー1と思うんですよ。世界のナンバー1、昔の座頭市を観て下さい。大好きな映画ですけれども、でも道徳観はしっかりしていた」

水島「うん」

モーガン「それは駄目だと言ってチャンバラ・シーンになるんですけれども、自分が持っている道徳観に違反した人に対しては許さない。弱い人を守る。それは日本人の心の中であるんですけれども、あのような人間がやるようなダンスじゃないとか、汚い文化が外国から流れ込んで来ているじゃないですか。それは偶然じゃないと思いますし、日本人を、アメリカ人国民レベルまで成り下げる為に、そのようなこの国の綺麗な文化を汚す為にやっているんじゃないかと思います」

水島「うん。そういう意味で、私が一番、よく例に挙げるのは、今、日本のテレビの中で時代劇のレギュラー番組が無くなったんですね。これは非常に特徴的で、特番とかいうことで藤沢周平だ、何とかだ、原作だと言ってドラマを時々作られるけど、というのはレギュラー番組って何かって言ったら勧善懲悪ですよ。悪い企みや悪い暴力に対して正義の暴力をもって規制すると」

モーガン「はい」

水島「それが印籠であったりする時もあるんだけど、大体、この刀でね。だから、これは、つまり悪い奴は悪い暴力でね、正義の暴力って、こういうもの自体を、まあ、それが現実ですよ」

モーガン「はい」

水島「これ、今、世界中を見れば戦争だらけですから、その問題を全部、無視させているというね、これも今、テレビとかああいうのを観ていて解るのは、そのねえ、暴力とか、『傷つく』とか、最近、言葉が凄く多いのは『傷つく』とかね、一体、何に傷つくんだっていうね。これは何度も言っているから、また同じことを言っているって言われるか分からないけど、その傷つきの一つの例として、私が教わったのは、実は私、レズなのと友達にカミングアウトした。そうしたら、友達が、ああ、そう？私は全然、気にしないから、大丈夫って言ったら、これで差別だっていうことが例として挙げられているんです。何処かの公文書でしたよ。何故かと言ったら、この女の子が一生懸命、葛藤してカミングアウトしたのに、そう大変だったねとか言わないで、ああ、そう、別に気にしないからって言われちゃった。それが思いやりのない心。ここまで来ちゃっているんですね」

モーガン「とんでもない」

水島「馬鹿みたいな話だけど」

モーガン「そう。それこそ、だからこそエマニュエルっていう総督がこの国に居る。この国の道徳を壊す為に、この国に居る訳です。そうさせているのは自民党です」

水島「はい」

モーガン「自民党が何か日本が主権国家とかと、よく言うじゃないですか。何を言ってるのよ」

水島「全くそうだね」

モーガン「それはサイコパスの部分ですね」

水島「はい」

モーガン「はい」

水島「まあ、ちょっとね、あ、いいですか。はい、どうぞ」

及川「ちょっと、やっぱり、この議論の中で、やっぱりグローバリズムの問題点って凄くいっぱい出て来るんですけれども、でも、そればかりになっちゃうと、どうしても絶望的になってしまうところもあ

るので、この流れが変わる可能性があるのかっていうところを考えてみたいと思うんですけど。本当に個人的な私の勝手な見方ですけどね。グローバリズムっていうのを歴史的に見たら、さっき伊藤先生が言われたみたいに、もう200年、数世紀前から、そういう流れがあったと思うんですけど、グローバリズムが全盛っていうのを一つ取り上げるとしたら2001年、例のアメリカでこれもYouTubeで言っちゃいけない話ですけど、つまりネオコンっていうのが力を持ち始めて、最初に伊藤先生が言われたレジームチェンジですね。アメリカがあちこちでレジームチェンジをやり始めた時代っていうのが一つあったと思うんです。

その時に911とかイラク戦争とかアラブの春だとかいうのがあった。これは全部、彼らがやって来た」

水島「はい」

及川「そんな中で2016年っていうのが一つの大きな契機で、この時にイギリスでBrexit、EUからの離脱があった。そこから同じ年にトランプが当選した。このトランプさんが当選した時に『私の大統領当選とBrexitは同じ現象なんだ』という言い方をしたんですけど…」

西村「ああ、そうですねえ、言いましたね」

及川「つまりグローバリズムに対して反グローバリズムの流れが来たんだっていう」

水島「うん」

及川「私は、この2016年っていうのは反グローバリズムの一種の革命だったと思うんですね」

水島「うん」

及川「ただ革命っていうのはフランス革命で見る通り、必ず反革命が来る」

水島「うん」

及川「それが、そのトランプ政権になったあとの、特に2020年、前回の大統領選挙があった時。この時に大統領選挙の例の問題と、それからパンデミックと。更にウクライナ戦争と」

水島「うん」

及川「これ、全部、同じタイミングで起きているんですよ」

水島「うん」

及川「正にグローバリストにとっては都合のいいことばかりが、何故か同じタイミングで起きている」

水島「うん」

西村「2019年からですよ」

及川「そうですね。今、要するにグローバリズムの潮流に対して反グローバリズムの革命があったとして、それに対して、またグローバリストが押し返した。次、また反グローバリズムの逆襲があるとしたら今年、2024年かなあと」

川口「うん」

及川「これが今日のタイトルの『グローバリズムの現在 2024』っていうのは、まずウクライナとイスラエルの戦争が結局、グローバリスト側が負けることになるでしょう。それから6月に欧州議会の選挙がある。私は今回の欧州議会の選挙に凄く関心を持っているんですけど、所謂、EU懐疑派」

水島「うん」

及川「EUそのものに対して疑いを持っている人達というか反対している人達。この人達が前回は、ちょっと増えたんだけど、今回の欧州議会選挙で、かなり増えるんじゃないかなと、これは期待ですね。それで11月にアメリカ大統領選挙でトランプさんが再選するということになると、この反グローバリズム勢力が、もう一度、巻き返す、そういう潮流、トレンドがグローバリズムの現在かなあという風に思っています」

水島「なるほどね」

及川「はい」

水島「それ、可能性として、そういう選挙とか色々ありますからね。それと、ちょっと、少し戻るかも分からないけど、今、丁度、例を出して貰ったウクライナ、それからイスラエル、ハマスと言うかパレスチナの戦争っていう、これは今日、私が自分の番組で午前中にやったんだけど、トランプ登場を阻止する為に何をされるかっていう、こういうタイトルでしたが一番、簡単なのはトランプの暗殺ですよ。あと他にもう一つ言うと、戦争拡大とか…」

モーガン「はい、そうですね」

水島「もうディープステイトと言われる既成のグローバル勢力の中心は、そう簡単に引っ込まない。だから、あがいて抵抗するというよりも、むしろ、もっと支配したいっていうことをやる可能性があるから、今おっしゃったように、このぶつかり合いがあると思うね。」

その時、やっぱり一番、大事なものは、我々が見ている、あれはイスラエルが千何百人も殺されて、反攻してね、今、2万7千人から2万8千人ぐらいパレスチナ人が死んでいる。これは数の問題じゃないっていうね、もう今、はっきりネタニヤフは二か国両立はないと。自分達は徹底的に反攻されないような状態を作ってしまう。ここまで言っちゃっている。

それでアメリカも、じゃあ、援助をやめるよって言えば、イスラエルは経済的にも現状でも全く立ちいかなくなるのに言わないで、まあまあ何とか停戦しろやとかね、一応、言っていますっていう状態になっています。この今言ったことは、はっきり言うと今のグローバル勢力の流れがね、この中で、今、はっきりブリックスとか、ロシア、イラン、インドというようなグローバルサウスの形の人達が別の価値観を持って自立しようとしている。

だから、今言った、これもぶつかり合いがあると思うんですけど、このところを具体的に皆さんに聞いてみたいと思うんですけど、伊藤さん」

伊藤「はい」

水島「ちょっと具体論で言うと、今、アメリカでも色々問題にはなっていると思うんですけど、イスラエルとパレスチナの戦争、ネタニヤフが突っ張って、ずっと最後までやるって言っているんですけど、これは伊藤さん、このイスラエルとパレスチナの、まあ、もう一つ極端に言うとイランまでいくんじゃないとかね、極端かどうか分かりませんが、この辺は今、どう考えていますか。これはグローバル勢力の…」

伊藤「まずイランの問題に関して言いますと、アメリカにとってもイランにとっても戦争をするのは利益にならないですから、両方とも本音では、やりたくないと思います」

水島「うん、そうですね」

伊藤「但し、アメリカのネオコンとイスラエル・ロビーには、アメリカとイランに戦争をさせたがっている人間が沢山、居ます」

水島「そうですねえ」

伊藤「もう、この連中はどうしようもないです。要するに、イラクに対して全く不必要な侵略戦争をやったり…」

水島「うん、挑発していますよね」

伊藤「ウクライナでロシアを挑発して戦争をやらせたり、今度はアメリカとイランを戦争させたいと考えています」

水島「そうですね」

伊藤「但し、C I Aとペンタゴンの真面な考えを持っている人達は、イランと戦争することに反対していますし、イランも勿論、やりたくない」

水島「うん」

伊藤「中国とロシアにとっては、アメリカとイランが戦争するのは、そう悪くないです」

水島「うん」

伊藤「というのは、アメリカはイランの軍事力、産業力を叩き潰す能力を持っていますけれども、イランを占領して統治する能力は持っていません」

水島「はい、ないですね」

伊藤「ですからイランを叩きのめしても、要するに、中東情勢が、より不安定になって、アメリカは中東に対して今よりも大規模な軍事介入を続けざるを得なくなると」

水島「うんうん」

伊藤「それで中東情勢が、そういう風に泥沼になれば、やっぱり一番、喜ぶのはロシアと中国ですよ」

水島「うん、うん」

伊藤「というのは、アメリカとイランが一旦、戦争すれば、アメリカは決してウクライナに出て来られないし、東アジアにも出て来られない」

水島「うん。うん」

伊藤「そうすると中国とロシアはやりたい放題ということになりますから、だから日本としても、勿論、アメリカとイランが戦争することには絶対、反対すべきですよ。僕は、トランプが当選したらイランと戦争することは無いだろうという風に期待しています」

水島「うん」

伊藤「パレスチナの問題に関しては、今、2万8千人ぐらい死んでいるとおっしゃいましたが、爆撃されて破壊されたビルの下に8千人から9千人の死体が埋もれているんですね。ですから、この人達の数まで入れると、もう既に4万人近く死んでいるんですね」

水島「なるほどねえ、う〜ん…」

伊藤「イスラエルは4万人、殺してもやめないと。エトジオンとかいうイスラエルの全安全保障会議の副議長だった人が居るんですね」

水島「はい」

伊藤「この人は、かなり良心的な人で反戦派ですけども、このエトジオンさんに言わせると、イスラエルのやり方っていうのは、イスラエルの大臣が一人殺されたら100人、パレスチナ人を殺すと」

水島「うんうん」

伊藤「10人、殺されたら、千人、殺すと」

水島「うんうん」

伊藤「要するに百倍返しだと」

水島「うん、うん」

伊藤「それがイスラエル人のやり方だと。これから言うと、千数百人、殺され、千百何十人殺されたら、イスラエルは10万人を殺しても当然だという風に思っているようですね」

水島「うん」

伊藤「特に、少なくともエトジオンさんに言わせれば」

水島「うん、うんうん」

伊藤「そういうことをやっても、イスラエル人っていうのは全く何とも思わない」

水島「うん」

伊藤「アメリカのマスコミと金融業と民主共和党の政治資金ネットワーク、この3つは、イスラエル・ロビーに握られていますから、アメリカの有力な政治家が、このイスラエルによる戦争犯罪、ジェノサイドに対して真正面から反対するということは無いでしょう」

水島「うん」

伊藤「だからイスラエルは続けようと思えば、今後、数万人のパレスチナの民間人を殺すことが続けられる訳ですよ」

水島「う～ん」

伊藤「但し、アメリカの世論を見ていますと、今回の戦争でイスラエルが正しいという風に言う人は60歳以上ですね」

水島「ああ」

西村「ああ～」

伊藤「逆に40歳以下になると、若くなればなるほどパレスチナの味方をするんです」

水島「うん」

伊藤「要するに若い世代は、もう8割ぐらいが今度の戦争はイスラエルが悪いに決まっているというのが20歳代ですね」

水島「うん」

伊藤「お聞きになっていらっしゃると思いますけども、アメリカの諸大学、特にアイビーリーグで学生達が、かなり徹底したイスラエル嫌いになっていると。そうするとアメリカの次の世代というのは、はっきり言って、イスラエル嫌いで、もうちょっと、はっきり言っちゃうと、ユダヤ嫌いという世代が増えて来る訳ですね」

水島「うん。いや、そうなっていますよ」

伊藤「僕は、もしアメリカのユダヤ人が真面な計算能力を持っていたら、これ以上、反イスラエル、反ユダヤ感情を若い世代に植え付けるのは、我々ユダヤ人の自己利益に反するから、パレスチナ人に独立した国家を持たせて二国体制にした方が、イスラエル人、ユダヤ人の利益になると計算するはずですけども、どうも見ているとイスラエル・ロビーにしてもネオコンにしても、そういう計算が出来ないみたいですね」

水島「うーん、うん」

伊藤「これは非常に不思議なことで、ユダヤ人っていうのは、要するに一人当たりの財産が世界一な訳で、教育レベルも世界一ですよ。それで仕事も出来るんですよ」

水島「うん」

伊藤「はっきり言って、世界一有能な民族だと思うんですね」

水島「うん」

伊藤「ところが、こういう非常に無神経で残酷で、最終的にはユダヤ人の得にならないようなことを平気で続けるんですね」

水島「うん」

伊藤「例えばアメリカの国内政治を見ていますと、やっぱり共和党の保守派、右派です。共和党の右派と、それからカトリックの右派ですね。カトリックの保守派。それから民主党の左派に、かなり鋭い強烈な反イスラエル感情が生まれて来て、これを放置しておくで、アメリカの国内政治が非常に不安定なことに、今でも不安定ですけども、益々不安定になると思うんですね。

とにかく、僕にとって驚きなのは、アメリカのユダヤ人っていうのは、これ程、頭がいいのに、何故、こんな当たり前のことが解らないんだろうと」

水島「うん」

伊藤「要するにパレスチナ人に自治権、与えてね、彼らに今のイスラエルがコントロールしている余力の3割ぐらい与えてね」

水島「うん」

伊藤「独立させればいいのに、それが結局、ユダヤ人の利益な訳でしょ」

水島「うん」

伊藤「そういう当たり前のことなのに、世界一、頭がいいはずのユダヤ人が解らないと」

水島「うん」

伊藤「これは凄く不思議です。皆さん、ご存じだと思いますけれども、過去1600年間、ユダヤ人は移民して行った殆どの国で嫌われ者になって、非常に多くの国から追放されているんですね」

水島「うん」

伊藤「これがユダヤ人の過去1600年間の歴史ですね。僕目から見ると、残念なことにユダヤ人は、もしかしたら、こういう運命をアメリカ国内でも繰り返すんじゃないかと、そういう風に見ております」

水島「うん。今は大事なことですけれども、頭がいいはずなのに、何故、こんなことをやるんだろうっていうことをね、みんな、本当に考えるんですね。それで結局、この間、実は別の外交討論をやったんですけども、中東専門家の石田さんとかに出て貰って、結論として出たのは、長い目で見たらイスラエルは普通にやったら消滅せざるを得ないだろうと。あそこにあるのがね。時間だけで見たら、あそこに居ることに相当、無理が出て来る。

例えばイランが核武装、いずれ将来して、ああいうハマスやヒズボラやね、ああいう戦術核を持たせて、自分達はやらないけど彼らがやったって。これだけ、殺されたんだからとかいうことになる、イスラエルでユダヤの人が住む理由と言うか、危険過ぎて、それで、あそこに居るのは、実はパレスチナ人とか他のアラブ人もイスラエルの国民として居る訳ですよ。

というようなことまであるので、今、伊藤さんの話を聞きながら、本当に頭のいい世界戦略を持っているはずのユダヤ人が、何故、ここでそうなるのかって、色々ナショナル・ユダヤと、それと異なるアシケナジム・ユダヤが居るとか色んな意見はあるけれども、イスラエルそのものの問題は、ここまで、はっきり言うと、虐殺っていいぐらいだと思いますよ。もう4万人ぐらいが殺されているっていうのはね。

でも、これは圧倒的に軍事力の差があるから、こういうことが生まれているけど、これを止めようとしていないというね。この感覚というのを、実はグローバリズムというものと、ちょっとね、私は被って考えるところがあるんですよ。それこそ寄生虫とか、ウジ虫とか奴隷とか、こういうのは殺したっていいんだと。綺麗さっぱり、面倒臭い時は抹殺しちゃえばいいという、あのカルタゴみたいだね、あとを残さず全部、きれいにしちゃうみたいだね」

モーガン「その通りです」

水島「こういうようなことが生まれるというね。だから、やっぱり、我々は日本人っぽく、パレスチナもイスラエルも、みんな、仲良くやって貰いたいっていう風に思うんだけど、現実には、そういう人達じゃないというねえ、日本人達は、この現実を自覚しないから、いつまでもウジ虫じゃない、寄生虫みたいなね」

西村「それはね、おっしゃる通りで、まあ、ネタニヤフは、それと同じようなことを言っている訳ですからね。そうなんですけど、実はイランもそうですよね。だってイランもイスラエルを地上から抹殺するのが使命みたいなことになっている訳ですからね」

水島「まあ、建前、言っていますよね。ただねえ、まあ、これ、ちょっと見方もあるけど、極めて、今、自制的だっていう…」

西村「ああ、そうですね」

水島「イランもフーシ派も攻撃はしているけど、サウジアラビアの製油施設とか、やろうと思えば、いくらでも出来るんですよ。大混乱を起こさせられるんだけどね」

西村「やってないですよ」

水島「やっていないんでね。みんな、自制的ですよ。もっと言うと、アメリカは、もしかしたらイランには手を出していないんですよ。革命防衛隊の外国に居る奴は殺しているけどね。だから、この辺が一体、どうなんだっていうのを今、聞いていてね、だから、そこんところが本当に謎ですよ。

実は、そのユダヤの人達がグローバリストと言うか、グローバリズムの中心的な存在であるってことも間違いないことだと思うんでね。これに左右される訳ですよ。我々はその寄生虫になっている訳ですから、はい。ということです」

及川「だからね、イスラエルっていう国が、このままでいったら、もしかしたら消滅するかもしれないっていう話を…」

水島「うん、そういう…」

及川「実はイスラエルの20年前ぐらいの元の首相でバラックっていう首相が居たんですけど、このバラックが昨年10月7日に始まった、この騒ぎですね。この直後ぐらいから、もう言っていて、あのイスラエル、あの地域に出来た国っていうのは、歴史的に80年、もたないって言うんですよ」

水島「うん、うん」

及川「要するに賞味期限があるって言うんです」

水島「うん」

及川「そのぐらいの期間が経つと、必ず王政が変わってくるって、ダイナスティが替わってくる」

水島「うん」

及川「だから今のイスラエルって、もう、そろそろ賞味期限になっている訳ですよ」

水島「うん」

及川「その中で起きた、まあ、はっきり言って茶番劇っていうかね、これはイスラエルが攻めているように見えて、自らを終わらしてっている現象ではないかっていうのを元首相自身が言っているの、私は、グローバリストの一つの、何て言うんでしょうか、グローバリストが持っている…」

水島「ニヒリズム」

及川「自虐的なイズムだと思うんですよ。だから、グローバリストっていうのは強いように見えて、最終的には自分で自分の国を滅ぼしているっていう愚かな連中じゃないかなって思うんですよ」

水島「うん」

モーガン「はい、悪魔ですから。ヒトラーは、どうしてもドイツを壊したかったんですよ。今の世は、自分の思っているように添ってくれないので、私達は、神様が人間をつくった。でも大失敗で終わったと思っっているじゃないですか。罪があるし、痛みがあるし、まあ、不完全なところがあるし、じゃあ、我々は新しくつくりますと言うんですよ。それが聖書の中では悪魔の始まりですよ。

ドイツの場合は、ヒトラーとかですね。ヒトラーが一番、嫌いな国はドイツだったと思いますよ。ドイツ人が中々自分の思っている様に動いてくれないので、じゃあ、絶滅させてやる。アメリカ人も今、見れば、アメリカの政府が明らかにアメリカを絶滅させようとしているんですよ。大嫌いだからです。

私の大好きなジェニファー・ゼン (Jennifer Zeng)、シー・バン・フリート (Xi Van Fleet) とボブ・フー (Bob Fu) とか、中国から亡命してアメリカまで来て戴いた、帰化されているかもしれないんですけども、その方々の話を聞くと、中国共産党って中国の経済を向上しようとはしていないんですよ。中国経済を壊そうとしているんです。それが中国共産党のやり方です。中国共産党は、だって儒教の本とかを燃やしたんじゃないですか。中国共産党ほど中国が嫌いな組織は無いですよ。それは寄生虫です」

水島「うん」

モーガン「日本は全く違うんですけども、皇室は全く違うんですけども、でも啓蒙思想的な政府は、みんな、自分の国が嫌いですよ。死のカルトです。出来る限り自分の国民を殺したいと思っっているのです。それが論理です。もし普通の人間として考えれば中々分からないと思うんですけど、今、及川先生がおっしゃった通りだと。グローバリストです」

水島「だから、本当にねえ、おっしゃるように何処の国を見ても、自分を破滅の道を選んで歩いているように見えるということがあるんですね」

モーガン「はい」

水島「まあ、そういうものと、もう一つは新たなそういう道とか、そういうものが見えないっていうね、誰もそういうものを提示できていない、ヨーロッパの文明文化っていうものの中も、その神様が死んだかどうかも分からないし、クリスチャンの方に言うと申し訳ない、ああ、クリスチャンっていうかカソリックの方に申し訳ないけどね。ただ、そういうような中で、つまりイデオロギーとか、さっき冒頭にちょっと言いましたけどね、そういう善悪とか罪と罰とかね、こういうもの自体が通用しない、もっと相対的化されてね、誰も信じなくなっている」

モーガン「はい」

水島「その中で一番、本当にやるのは各民族の持っている伝統や文化っていう我々の国の中にコアで持っているようなもの。こういった事物ですよ。今日は、もう時間がなくなるので、最後に、ちょっと言

わせて貰うと、例えば、山を見て、月を見てっていうね、日本の歌っていうのは、月が出ました、日が沈みました。葉はさわさわとしていますと。こういう歌を作るんですよ。つまり、これで歌はね、悲しいねとか苦しいねとかね、情けないねっていう風には言わないんですね。日本の和歌の本流は、そういうことで、自然の在るがままを歌うと、そこから滲み出て来る感情投影が沢山ある。

こういう文化とね、やっぱりハッキリさせなきゃいけないっていう、まあ、はっきり言ってユダヤの人の文化とかね、まあ、西欧もそうですけども、こういったものと、どうしても対立するけれども、その狭間の中で大事なものっていうのは誰か見つけていなきゃいけない」

モーガン「うん」

水島「日本人がね。或いは外国の人もね。西洋人も。モーガンさんの場合はカソリックとしてのね。私はカソリックを相当、尊敬しているんです。実は、昔ですけど凄い昔、一回、ちょっと入ろうかと思ったことがあるぐらいだったけどね、ただ、やっぱり、どうしても、色んな意味でのね、日本っていうものの中でね、私は禅の方に行っちゃったんですけど、今言ったように心の拠り所がなくなった人達が選ぶとなると、金とか権力とか、さっき言ったね、こういうものでしかないから、極めて浅ましい世界に。それも世界的な交通網とかも便利になっているから、アフリカ迄、全部、巻き込もうとしている」

モーガン「はい」

水島「だから太陽光発電にしる何にしる、全部、そういう押しつけを色んな形で計算しながらやっているっていうね、こういう中で私達がこれから生きていくっていうことなので、まあ、具体的なことを、今日、色々な事も話して貰いましたが、時間も段々無くなって来たので、それぞれ一言ずつ載せて纏めたいと思いますけども、結論は出なくてもいいんですけど、じゃあ、西村さんから」

西村「はい。要するにニヒリズムの極致、もうニヒリズムを通り越したところに今、来ているんだと思うんですよ。だから、それがグローバリズムの正体というかね、グローバリズムそのもので、だから金と権力だけを追い求めるということになっちゃうと思うんですね」

水島「具体的なね」

西村「ええ。それで、所謂、グレートリセットという言葉があるようにね、それで世界の国境が全部、無くなればいって本気で考えているかもしれない訳でね。そういった考えって何処から来ているのかなあと思ったらね、結局、考えてみたらね、 Kommunismus ですよ。だから 1960年代末期のね、あれは北京で始まった文化大革命なんですけど、それが結局 21世紀になってアメリカに飛び火してね、そこでアメリカの中でローカライズされて醸成されたのは正にアメリカの文化大革命で、それがキャンセル・カルチャーって言葉そのものになっている訳じゃないですか」

モーガン「はい」

西村「それがやっぱりグローバリズムと結びついている訳でね。じゃあ、日本人はどうしたらいいのかって言うと、最初に申し上げたようにあれですよ。さっき最初の時間に、昭和 18年に中央公論から出た単行本の事を話しましたがね、『世界史的立場と日本』というものを、やはり、もう一度、考えなければいけないんですよ。それが今、出来ない訳で、当時、あの時は京都学派の 4人が考えて、本当に 2年に渡って 3回、討論をやって 1冊の本にして、それでベストセラーにもなっている訳ですよ。昭和 18年の時点で、ですよ。

それでちゃんと享受できた日本人も当時は居た訳ですよ。ところが今、そういう知的環境も無い訳で。だから、それを日本人はどうやって、もう一度、やっぱり、日本人が足元を見つめ直すしかないんであってね。それがグローバリズムに抗う、抵抗の拠点にしかないんですね。

具体的な例として、まあ、具体的じゃないかもしれないけど、さっき申し上げたように、大政奉還であって、それこそワシントンにある幕府を日本に取り戻さないといけない訳でね。ええ。まあ、ちょっと抽象的になりましたけどね、私の今日の討論の結論と言いますか、感じたことは、まあ、そういうことです」

水島「はい、有難うございます。では、川口さん」

川口「はい。今、ずっとアメリカがグローバリズムを主導して、そのグローバリスト達がドイツとか日本を牛耳っているというのは、その通りだと思うんですけど。ただドイツにも日本にも洗脳されていて、それが正しいと思っている人達と、そうじゃない人達っていうのは居るし、ドイツでも日本でも上の政治を今、握っている人達というのは、そっちに与しちゃっている人だし、でも、それと同じことがアメリカの国内でだって起こっていて、全員が、みんな、洗脳されている訳じゃなくて、そうじゃないと思っている人も居るんだけど、だけど今、もう既に欧米と日本などは、もう、それに抵抗できなくなっちゃっていると思うんですね。洗脳されてない人達も。何か言うと、それこそバンされたり、言論の自由が、かなり無くなっているから抵抗できない。

ただね、先程の希望の話じゃないですけど、その欧米と日本って世界の一部であって、その他の、先程のグローバルサウスとか、そういうのって全然、それに毒されていないって言うか洗脳されていない人達が殆どですね」

水島「まあ、そういうのが多く居ますよね」

川口「政治の上の方の人も洗脳されていないと思う。どっちかと言うと抵抗していると。まあ、ロシアとか中国なんかは、どっちについての方がいいと言うと、是々非々でやっているのが中国だけど、でもロシアとかは完璧にそれに対立していますよね。それで、昨日の丁度、ニュースですけど、私、面白いなあと思ったんだけど、アゼルバイジャンの総選挙があって、開票の所って言うか選挙の当日だったのかな。そうしたら、そのニュースで、国際監視委員みたいなのが入っているじゃないですか」

水島「うん、うんうん」

川口「あれは国連ですかね。それで、その人が凄い文句を言っていて、もう、この国で、怪しいことが、いっぱいあるから、せっかく監視しようと思っても、とにかく追い出されたり、それから何か警察が呼ばれたりして、僕達は監視が出来ないとかって凄く怒っていたんですよ」

一同「(笑)」

川口「それで、私、それを観ながら凄くおかしくて、それは出来ないでしょうって。だって貴方は全然、歓迎されていないからっていうのは勿論、あるんですけど、だからと言ってアゼルバイジャンの選挙が正しいとか、そういう風に全然、思っていないし、判らないですよ、全然、判らない。だけれど、彼らにしてみたら、あんたねえ、選挙の監視だったら自分の国でやりなさいって言いたいんだと思うんです」

一同「(笑)」

川口「だから、じゃあね、その国連が行って監視するとかっていうのを、このドイツなんかだったら多分、監視されたけど、全然、何も無かったと言って貰いましたって言うかもしれないけれど、アゼルバイジャンはね、もう、あんた、帰りなさいって言って追い出している訳ですね。

でも、そういう国が、どっちかと言うと、そっちの方が多数であるから、だから、これからは、どういう風に展開するかっていうのは、やっぱり分かんないだろうなあと思っています。だからグローバリズムで、このまま言論が死んでしまっという風になるか、それとも揺り戻しがあるか巻き返しがあるかっていうのは、ただ私達次第かなという風に思っています」

水島「そうですね。はい、有難うございます。では、及川さん、お願いします」

及川「はい。今、川口さんが言われた希望っていうかね、揺り戻しっていうところで、私は前からドイツのAFDっていう政党に凄く注目していて、今日の川口さんのお話を聞いて、ああ、そんなに戦っているんだっていうのにある種の感動を覚えました」

水島「うん」

及川「凄いなって。そういう勢力って実は、今、このグローバリズムの現在、結構、世界に居ると思うんですよ」

水島「うん」

及川「今、川口さんが言われた通り、それでも抵抗している人達っていう。例えばニュージーランドって国があります。ニュージーランドって国は去年、選挙があって、第三党になった政党が、ニュージーランド・ファーストっていう名前の政党なんですよね。これは、明らかにトランプさんのマガと同じ考え方ですよ。反グローバリズムです。ここが第三党になって連立政権に入ったんですよ。連立政権に入って保守政権が出来て、前がそうじゃなかったじゃないですか」

水島「うん」

及川「それで保守系に入って、そのニュージーランド・ファーストが具体的に出した政策の中に、国益テストっていうのがあるんですね。国益。グローバリズムっていうのは、要は国が無い訳だから自分達の私利私欲」

水島「うん」

及川「それが利益な訳ですよ」

水島「うん」

及川「そっちを優先している。だけど、このニュージーランド・ファーストっていう政党は、国益を優先しましょうと」

川口「うん」

水島「うん」

及川「その国益になっているか、なっていないかで全てを判断しましょうっていう」

一同「うん」

及川「これ、第三党だけど政権に入ったから、これが採用されて、今、WHOっていうグローバリズムの組織があるんですけど、ここが自らのIHRっていう世界保健規則っていう自分達が創った規則を変更しようとしているんですね。グローバリズム的に変更しようとしている。その一部の変更を承認しますか、どうかっていうWHOの加盟国に対して、言っている期限が11月末だったんですよ」

水島「うん」

及川「日本は当然、そのままオーケーしているんですけど、ニュージーランドのその政権は国益テストをやったら、これは国益に合わない」と

水島「うん」

川口「うん」

及川「だから拒否しますと言って拒否しているんですよ」

川口「ああ～」

及川「だからニュージーランドはね。こういう政党がニュージーランドにも出て来ている。あと、やっぱりヨーロッパで言うとハンガリーですね。ビクトル・オルバンっていう、この人も大好きですけど、ビクトル・オルバンの政党のフィエスっていうんですかね。このフィエス・ハンガリーっていう政党は、やっぱりハンガリー・ファーストですよ。非常に現実的にプーチンのことを非常に慕っているっていうか」

水島「そうですね」

及川「はっきり言って親プーチンの政党ですよ」

川口「尊敬していますよね」

及川「プーチンのことを尊敬していますよね」

川口「(頷く)」

及川「でもEUの一部なので、EUの中で今、もう完全に孤立化していますね。このオルバンがね。オルバン自身が非常に今、追い詰められているんだけど、でも、こういう勢力が、ハンガリーにも居る。それから、フランスには国民連合。マリーヌ・ルペン。ドイツはAFD。イタリアは多分、どうなんだろう、メローニさんね。でもメローニのイタリアの同胞っていうのも、これも移民政策では、私は、やっぱり反グローバリズムだと思うんですよ。

メローニは今、凄く攻められているけど、だけど、現実には、物凄い移民が怒濤の如く、今、イタリアに来ている訳だから、メキシコと同じことがイタリアで起きている訳ですよ。でも、こういう政党が世界に出来ているので、今日、たまたま始まる前に社長と、ちょっと話していましたが、こういう反グローバリズムの勢力が、それぞれ少数派かもしれないけど、世界で繋がっていったらね、横の繋がりが出来ていったらパワーを持つかなあと。さっきのグローバルサウスと一緒にですよ。今年は、何かそういう流れを積極的に作っていかなくちゃいけないんじゃないかなというのは感じています」

水島「そうだよ。はい、有難うございます。ではモーガンさん、お願いします」

モーガン「あ、はい。今日は本当に勉強になりました。いつも、この番組に出演させて戴いて本当に感謝しております。皆様のご指摘を心で受け止めたいと思います。希望としては変な話ですけども、この訳の判らないオジサンのあげたいと思います。何故かと言うと、私は、この日本に亡命しているからです。先程、社長がおっしゃったカトリックについておっしゃったんですけども、私はずっと前から、まあ20年前の話ですけども、毎週水曜日、お寺に通って座禅をしていました。座禅しようと思ったら、もう直ぐに全身が痒くなって…」

水島「(笑)」

モーガン「もう全然、中々出来ないんですけども、もう座禅で失格ですよ。でも、私は仏教を心から愛していて、ナーガールジュナ、道元の論理には反論できないと思う。結局、人間として、そこまでは言えると思います。亡命者として、この国に居させて戴いているというのは、日本が世界の希望の光ではないかと思っております。

宗教の話ですけども、グローバリズムと宗教が、かなり重なっているんですけども、キリスト教は、実は500年前から死んでいると思いますよ。教えとしてじゃなくて、実際に組織として死んでいるんですよ。例えば13世紀ぐらいのヨーロッパの絵を見ると、ヨーロッパの人々が普通に肌の色の濃い方を洗礼しているとか、そのような絵は見えるんですよ。

つまりヨーロッパでは人種差別は無かったんですよ。人種差別はどうやって始まったかと言うと、大体、カトリックの人が南米とかメキシコとかあったと、プロテスタントの場合は、北米とかへ行って現地人が大勢、死んじゃった訳です。殺されたりとか、また病気にかかったりとか、大勢、死んだんですけども、労働力が足りないのだから既にあった人身売買の一部を、ここまで流したっていうことで、アフリカから人々を誘拐、拉致して、そこから制度的にアフリカ系イコール奴隷っていう考え方が出来ちゃった訳ですよ。

途中でキリスト教の考え方が蒸発したっていうか、無くなったんですよ。今のアメリカのやり方、あとは西洋のやり方を見ると、本当は殆どキリスト教を信じている人は居ないと思います。

だって、バチカンは先程おっしゃった、フィデューシア・サプリカンスということで、ローマ教皇が、じゃあ、アフリカでは、こういうことは多分、通じないだろうと言われたら、いや、アフリカ人は違うと言うんですよ。今迄、ヨーロッパの人々が、所謂、新世界まで行っても500年間、経っているんですよ。未だにローマ教皇として、みんな、白人です」

水島「うん」

モーガン「み～んな白人。っていうことは未だ認めていないです。未だ奴隷を飼っているというような発想が強いってことです。今、最後の最後のニーチェは多分、そういうことについて言っていたと思うんですよ。神が死んだって、ニーチェがそうやって予言したんじゃないで、ヨーロッパ人が自らで数百年間かけて、植民地をやって大虐殺をやって、全くキリスト教とは関係ないことばかりやっていて、それでキリスト教が死んじゃったと、ただニーチェが言っただけだと思います。道徳は何だろうと言っていて、ワシントンが、ビザンチンになっています。最後の最後の、こう、偽りのキリスト教の拠点としてワシントンがあって、その周りを、みんな、全く新しい実情になっていて、何故か日本がビザンチンの中に入りたいと言って、我々はビザンチンと一緒に死にたいと言っている。

それは、おかしいですから。日本を本当の本来なる文化と文明が希望だと思っていて、それが一つです。最後、イスラエルって、どういう国か。よくユダヤ人とかっていう話が出てはいるんですが、私は同様にイスラエルってユダヤ人、ユダヤ教とほぼ関係が無いと思います。イスラエルってザイエニズムっていう概念の上に築いている国ですが…」

及川「シオニズムだね」

モーガン「ああ、シオニズム。シオニズムはシオニストの人々の過半数は無神論者だったですよ。殆どユダヤ教を拒否して否定して、国としての、つまりユダヤ教を政治化したっていうのがシオニズムで、そのようなところが無くなって、もうユダヤ教とは関係ないと思いますし、シオニズムは何でアメリカ人が庇っているかって言うと、例えば、イエシャヤフ・リーボヴィッツ (Yeshayahu Leibowitz) っていう哲学者が居るんですが、あの方の本を読むと、このシオニズムって長持ちはしないと書いているんですよ。イスラエルの人、ユダヤ人として。

何故なら、これは植民地の種類だからです。我々はずうっと植民地主義者としてパレスチナの人々を占領しているから、それは長持ちしない。イスラエルとアメリカは、なんで、こうやってくっついてるかって言うと、アメリカは神話の国、我々はニュー・イスラエルと。この大陸で新しいイスラエルを築いたって自負しているんです。それで、イスラエル・ロビー。イスラエル・ロビーがそれに寄生しているんですよ。私達が本当のイスラエル。あなた方が新しいイスラエル。協力しましょうと言っていて、キリスト教とユダヤ教と関係が無いですよ」

水島「うん」

西村「なるほどね」

モーガン「それは、ただの寄生同士のやり方ですよ」

西村「ああ、凄く解り易いですね」

モーガン「そう。そういうことですよ。ユダヤ人とか、先程、伊藤先生がおっしゃったんだけど、何故、アメリカの中のユダヤ人は、このイスラエルは危ないと、何故、分からないかって言うと、何故ならアメリカ人だからです。ユダヤ人とは関係無いですよ。バリッパリのアメリカ人ですよ。バリッパリ、アメリカの神話を信じていて、どちらかと言うと、アメリカという偶像を崇拝している人です。あの人々はユダヤ人じゃないですよ」

西村「じゃあ、サーナン・イスラエルセンターなんかも、そういうことになるんですか」

モーガン「また、それは違う。コメンタリーとか、ネオコンは殆どユダヤ人とピューリタンが協力しているじゃないですか。それはアメリカっていう偶像を崇拝している連中です。ということは、シオニズ

ムとか、何故、イスラエルが虐殺しているかって言うと、アメリカっていう神話の延長線上でやっているんです。つまりイスラエルっていう国はアメリカの奴隷に対する精神を汲んで、中東でそれを再現している訳です。我々は中東のアメリカ人です」

水島「うん」

モーガン「中東の北軍の奴らということも言ってもいいと思います。つまり非白人は殺していい。どうしてもいい」

水島「うん」

モーガン「収容所の中に入れていい。ルーズベルトが同じことを、日本人に対してやったじゃないですか。収容所の中に入れて家畜かのように、それは普通の常識ですよ。ピューリタンとシオニストの常識なので、アメリカとイスラエルは多分、心中すると思います。一緒に死ぬと思いますよ」

水島「なるほどね」

モーガン「でも日本は心中しないで…」

一同「(苦笑)」

モーガン「ビザンチンから逃げて下さいと、私は言いたいです」

一同「(笑)」

水島「なるほどね」

モーガン「西洋の本質を掴んで、日本はどういう国かと思い出して。私は亡命者だから、この国を愛しているから、それを思い出して戴きたいと思う。日本に住みたい。アメリカ2に住みたい訳ではなくて、日本に住みたいからです。以上です」

西村「はい」

水島「モーガンさんね、今、シオニズムの話が出たんだけども、所謂、ネオコンと言うか、世界を、まあ、ディープステイトというかね、こういう支配している人達は、ユダヤ人が中心だと言われているけども、このシオニズムとグローバリズムというのは、相関性とか共通性の発想の仕方というのは、似ていると思いませんか」

モーガン「はい、思います」

水島「思いますね。やっぱりね。はい」

モーガン「思います。同じ啓蒙思想ですよ。みんな、シオニズム、グローバリズム、あと、ごめんなさい、今のバチカン。それはキリスト教とは関係が無いですよ。それはキリスト教版シオニズムです。無神論者が集まって、キリスト教を装って、でも、そうじゃなくて、グローバリズムを。だって、この国に来た人々はグローバリストでしょう。スペインとポルトガルから500年前、400年前に、この国に来たのはグローバリストですよ。結局のところイエズス会」

水島「イエズス会だね」

モーガン「優れているグローバリストですよ」

水島「だから、あの頃、15世紀ですか、16世紀だ。ポルトガルとかね、あれがやった頃、私は本を読んだことがあるんだけど、やっぱり、あのローマ教皇が異教徒は、みんな、殺していいと」

モーガン「そうです」

水島「そういう公式的なものもやっていたから、やっぱり、そういう意味で言うと、その異教徒とね、信者に対するあれが確かに違っているんですね」

モーガン「川口さんに対して申し訳ないですけども、西洋者は元々野蛮です。野蛮です」

水島「なるほど（笑）」

モーガン「野蛮」

水島「はい」

モーガン「キリスト教が、その野蛮性を出来るだけ抑えようとしたんですけども、キリスト教が無くなったら、野蛮性がまた芽生えて来たんですよ」

水島「はい」

モーガン「私の先祖も野蛮だったんです」

水島「いや、だからねえ、これを、いつも、まあ、色んな討論で出るんだけど、やっぱり日本の場合、啓蒙主義者たる織田信長が、一向一揆とか一向宗の信者を本当に全員、虐殺するようなことをやったんだけど、あと、他の所では日本の歴史の中で大体、滅ぼさないんですよね」

モーガン「そう」

水島「国譲りっていうね」

モーガン「野蛮じゃないからです。はい」

水島「出雲の」

モーガン「そうです」

水島「出雲族もみんなお祀りしてね」

モーガン「はい」

水島「やるみたいなの、こういうやり方なので、だから非常に今、お話の説得力があったんだけどね」

西村「南蛮人っていう言葉は、非常に正しかったっていうことですね」

モーガン「正しいですよ」

西村「室町時代にね」

モーガン「この国が、あの連中を真似する必要は全くゼロです。ゼロです」

水島「はい。有難うございます」

モーガン「以上です」

水島「では、最後に伊藤さん、お願いします」

伊藤「ちょっと面白くないとお考えになる方も少なくないと思いますけれども、最後に二つだけ、ちょっと抽象的な意見を言わせて貰います」

水島「はい、是非」

伊藤「一つはグローバリズムに関して言うと、結局、これは、その基礎となっている思考パターンっていうのは、先程、言いましたようにリベラリズム、それからエガリタリアニズム、それからデモクラシーですけども、それと同時にマテリアリズム、物質主義ですね」

水島「ああ、そうですね」

伊藤「それから、もうちょっと悪く言うとマンモニズム、mammonism、拝金主義、お金を崇拜すると」

水島「そうですね」

伊藤「マテリアリズムとマモニズムと、それからユーティリタリアニズム。ベンサムが言い出した役に立つことが良い事だと」

水島「はい」

伊藤「実はね、役に立つことが本当に良い事なのかっていうのは、哲学的に怪しいんですよ。ということは、役に立たなくても良い事って、いっぱいあるんですね。それを簡単に役に立つことだけやっちゃあいいだろうっていうね、これは凄く浅ましい考え方で、19世紀のあとダーウィニアン・ストラグルとソーシャル・ダーウィンにするんですね。強い奴が勝ちだと。勝った奴は弱い奴を踏みにじって、それで人類が進化してきたと」

水島「うん」

伊藤「それで20世紀になると、第一次世界大戦、第二次世界大戦という全く不必要な戦争をやって、中国とロシアでは革命闘争という、これもまた何千万人も殺す、全く不必要なことをやって、21世紀になるとグローバリズムリズムが、イラク戦争とか、それからシリア、リビア、ウクライナで全く不必要な戦争をやっていると」

水島「はい」

伊藤「これを見ると、19世紀、20世紀の人間の価値判断は、ちょっと、どうかしているんじゃないかと言わざるを得ないんですね」

水島「はい」

伊藤「先程から水島さんが何度もおっしゃっておられるように、ヨーロッパ人は神を失ったと。キリスト教を失った」

水島「うん」

伊藤「神を失えば残るのは人間だけですから、人間というのは、みんな、自分の利害打算を基準として理屈を言っているんです。人間達が自分達の目先の利害打算だけで理屈を言うようになったら、もう黒を白と言い、白を黒と言い、何でも勝てばいいというオポチュニズムとニヒリズムの世界になる訳ですね」

水島「そうですね」

伊藤「ここで問題なのは、じゃあ、神の視点、Divine View Pointと」

水島「うん」

伊藤「神というものが人間を統治し、人間の価値判断というのは神から与えられたんだという考えを失ったら、それじゃあ、我々は身もふたもない浅ましいダーウィニアン・ストラグルで、勝った奴が勝ちだということだけの世界に留まっていいのかと」

水島「うん」

伊藤「ちょっと面倒臭い話ですけども、僕はそうは思わない訳ですね」

水島「うん」

伊藤「イギリスにホワイトヘッドという有名な数学者兼哲学者が居まして、彼の本を読んでいたら、世の中には、実は人類には二種類の神のコンセプトがあると」

水島「うん」

伊藤「ひとつ目は勿論、一神教のユダヤ教、イスラム教、キリスト教の神のコンセプトですね。けど、もう一つはソクラテス、プラトン、デカルト、スピノザ、カント、それからホワイトヘッドなんかが唱えていた究極の真善美、普遍性と永遠性を持つ真善美というのが存在するのだと。人間の価値判断は、そのような Divine Existence、Divine Value というものを基準として考えるべきであるというフィロソフィカル GOD、哲学的な神という概念が成り立つ訳ですね」

水島「うん」

伊藤「自分の事を言っちゃうと、僕は、この Religious God、ではなくて Philosophical God、もしくは Philosophical Devinity という立場をとる訳で、大体、そこから、ものを見ることが多いんですね」

水島「うん」

伊藤「面白いことに、そういう哲学的な神という視点を支持する側から見ると、キリスト教神学の7割か8割は共感できるんですよ」

水島「うん」

伊藤「ですから、僕はキリスト教文明に対して、とっても親切でヨーロッパ人がキリスト教的な価値判断を失ったのは、背筋が寒くなる程、恐ろしいという風に考えているんですね」

水島「うん」

伊藤「逆に、ロシアは最近20年間でロシア正教を信じる人が、30%から70%と2倍以上になった訳でしょう。これって歴史的に奇跡ですよ。本当に奇跡的なことがロシアで起こっていて、今、世界でキリスト教って言うか、そういう Religious God、宗教的な神の視点というものを、もう一度、取り戻したので一番、凄いのがロシア人ですよ。だから、最近、ロシア人って凄く自信に満ちているんですね」

水島「うん」

伊藤「しかも、例えば去年は1年間でロシア軍に志願したのが44万人でしょう」

水島「うん…」

伊藤「凄いんですよ。戦争やっている最中に44万人も志願してくる訳ですね」

水島「うん」

伊藤「プーチンは、今年は30万人ぐらい志願してくるだろうって言っているんですけども、このねえ、何て言うか、あのロシア人の自己犠牲の精神の強さね、これは、やっぱりロシア系正教を信じる人間が7割になったということと切り離せないと思うんですね」

水島「うん」

西村「なるほどね」

伊藤「もう一回、話を元に戻しますと、人間っていうのは人間中心に価値判断をすると、価値相対主義の泥沼に入っちゃうんですよ」

水島「うん」

伊藤「人間が一番、大切なんだと。そうすると、あんた、人間を、他の人を傷つけてはいけないとかね。私は傷ついたとか、私は傷ついたから何とかして頂戴とかね、要するに、みんな、自分のことばかり考えるようになる訳。そうすると、ものを考える視点がどんどん浅くなって、決まった視点、StableなView Pointという安定した価値判断をする視点が無くなってしまいう訳ですね。

ですから、僕は今のヨーロッパ人が軽率なことばかり言っていて、ポリティカリー・コレクト、政治的な正当性とポリコレ、もしくはウォークですね。要するに意識が高い何たらかたらとかいう、そういうつまらないことばかりやり出して、それから最近、ヨーロッパで流行った哲学っていうのは、実存主義とポスト・モダンでしょ。実存主義もポスト・モダンも定まった価値判断なんか、いくら探しても出て来ないんですよ」

水島「うん」

伊藤「だから、あんなものを追いかけても何の為にもなりやしないと。僕自身は非常に少数派ですけども、もしReligious God、宗教的な神という視点を持ってないんだったら、出来ればPhilosophical Godとカントとか、プラトンとかスピノザとか、そういう視点を持って欲しいなと。そうしないと、我々はニヒリズムとオポチュニズムの泥沼から抜け出せないだろうと」

水島「なるほどね」

伊藤「これが一つです。もう一つは、非常に簡単な理屈で、アメリカが1992年以降の一極覇権主義、世界を一極にしてアメリカが全てを支配するという馬鹿なことをやり出したので、現在の国際紛争、国際情勢がどんどん悪くなっている訳です。アメリカはこの世界の一極化に失敗して、現在の国際政治っていうのは三極構造になっている訳ですね。中国とアメリカは英語で言うとOffensive Hegemonと。攻撃的な覇権主義国家」

水島「うん」

伊藤「ロシアは西洋社会では攻撃的だと言われてはいますが、僕は、過去30年間のロシアを見てみると、むしろDefensive Hegemonと」

水島「うん、うん」

伊藤「要するに防衛的な覇権国であって、本音では攻撃的ではないんですね」

水島「うん」

伊藤「だけど問題なのはね、tripolar、三極構造になっていて、中国とアメリカは、攻撃的な覇権主義国家だし、ロシアは、やむを得ず防衛的な覇権主義をやっていると。そうすると、国際政治に於いて、Stabilizerとバランス・オブ・パワーを安定化させる勢力というのが、殆ど無い訳ですよ。ですから現在の国際政治に於ける三極構造というのは凄く危険なんです」

水島「うん」

伊藤「この三極構造をやめさせないと、戦争はどんどん続きます」

水島「そうですねえ」

伊藤「下手すりゃ第三次世界大戦になると、そういう方向へ行っちゃう訳ですね」

水島「なるほど、う〜ん」

伊藤「僕は、やはり日本とドイツが過去の戦争と、それから過去79年間の対米隷属主義、アメリカの寄生虫になってきた歴史を、しっかり反省して、日本の場合は、1910年の日韓併合の時から現在までの過去114年間の外交政策と軍事政策を反省して、ドイツの場合はヴィルヘルム2世(Wilhelm II)という凄くお馬鹿さんが、ドイツの皇帝になって、これは1888年だと思いますけれども、過去136年間、僕はドイツ人というのは外交政策と軍事政策で失敗してきたんですね。だけど国際政治を

見ていると、カラガノフさんが言うように、ドイツと日本は、もう一回、独立しないと国際政治は安定しないんですよ」

水島「そうですね」

伊藤「だから、僕は、日本とドイツが自主的な核抑止力を持って独立国になって、日本もドイツもインドと同じような核武装した中立主義国家という風になるべきだと思うんですね」

水島「はい」

伊藤「そうすると、アメリカ、中国、ロシアが覇権主義国家であるけれども、日本、ドイツ、インドは自主的な核抑止力を持つ中立主義国家になる訳です」

水島「うん」

伊藤「中立主義国家っていうのは国際政治を Stabilize、安定化させる勢力ですね」

水島「そうですね」

伊藤「ですから現在の三極構造は危険過ぎますから、これを、なるべく10年以内、15年以内に6極構造の方向にもっていくと」

水島「うん」

伊藤「そういう風にしないと、現在の国際政治の混乱っていうのは収まらないんじゃないかと、そういう風に考えています」

水島「なるほど。はい、なるほどね。色々多面からお話し戴きました。インドとかいうのは特に、本当に大事なところだと思います。あそこは核兵器を持っているし、世界で一番、人口がある。これから25年か26年には日本のGDPを追い越すっていうような国です。でも、ここが核兵器を持っているけれども、人の国を圧迫しているような話は聞いたことが無いですね。

それから日本人の好きな民主主義国、政権交代がある国だということも含めて、それからインド人は強かな人達ですけど、少なくとも国としては日本に対して親日的な姿勢を持っているということも考えると、そういう意味では、色んな意味でインドというのを、また、忘れちゃいけないと思います」

西村「今日、ちょっとインドを語ることは出来なかったですけど。ええ」

水島「そうですね。はい。というようなことで、今日は『グローバリズムの現在2024』ということで終わらせて戴きます。有難うございました」

一同「(礼)」

***** お わ り *****